

外陣講義文書

「第 1 講義文書」 (0 = 0 プロベিশョナー)

第 4 章

小宇宙と大宇宙

- | | |
|------------|-------------------|
| 1 | オカルト的解剖学 |
| 2 | 身体と宇宙の照応に関する歴史的考察 |
| 3 | 光体と生命の木 |
| 4 | 生体磁気 |
| 5 | 視覚化の練習 |
| 6 | 図形応用法 |
| 7 | 魔法鏡とオーラ |
| 8 | ゲマトリア |
| 9 | フロー体験の応用 |
| 瞑想課題：視覚的観想 | |

THE OFFICIAL ORGAN
OF
I::O::S::

PUBLICATION IN CLASSES C~D
IMPRIMATUR: M FRATER I::O::S::

First published in 1986 by I::O::S:: private edition (ver.1).

Second published in 1998 by Sekibunsha (ver.4).

Third published in 2005 online versions by I::O::S:: (ver.5).

This Edition Fourth, Revised and Expanded in 2013 (ver.6).

All rights reserved. © Tzutom Akibba 1986, 1998, 2005 and 2013

知識講座

1 オカルト的解剖学

魔術の根本原理のなかに大宇宙と小宇宙が照応しているという信仰があるのは、既に述べたとおりである。これを万物照応（Correspondence）と呼ぶが、その概念が転じて小宇宙である人体には大宇宙の総ての要素が潜んでいるとする信念が生まれた。

例えば、右耳は土星、左耳は木星、右目は太陽、左目は月といった風にてある。少し、趣旨は違うが、腕の末端にある五指は、親指が「霊」、人差し指が「水」、中指が「火」、薬指が「地」、小指が「風」に帰属する。その他、内臓に黄道十二宮の各々のサインを当てはめたり、このアイデアの応用例は枚挙に暇がない。

しかし、この観念はそれほど荒唐無稽であろうか。人間の胎児が母体のなかで微小な胚珠から成長し、赤子になるまでの過程を見てみると神秘的と言うほかない。原始的な魚類に似た姿から、両生類的生物に変異し、爬虫類もかくやという容貌になり、やがて尾を落として人間となる。胎児が人間の赤ん坊の形を取るまでは、地球の進化の歩みを早回しにするような急速な変態を経験するのである。

多彩な神秘的挿絵で有名な『ベリー侯の時祷書』には、人体に天体が照応する美しい絵が紹介されている。右図は同書において「占星学的人体」と呼ばれ、⁽¹⁾ 上下左右にはベリー侯の家紋、下方左右には個人的アナグラムVEがあしらわれ、中央の楕円形のマンドルムのなかに、背中合わせの人体に星座が模されている。

人間の内部に星空があるという構図は古くから使われて来た。卑俗な肉体の内部に、天の星々に呼応する要素があるというロマンチックな思考が好まれたのであろう。そもそも今日興勢を極めている占星術とは、人間が誕生した瞬間、或いは任意の瞬間さえも惑星の影響を強く受けているという信仰ではないか。

それでは人体のどの部分が星の影響を受けるのか、内臓器官だろうか、循環器系だろうか、もっとありそうな神経系だろうか。ロバート・フラッドは『四大天』のなかで、「火は胆汁や胆嚢に、風は肝臓の造血作用に、水は腸内分泌液に、地は大便に照応する」と書いている。これは、つまり星の影響下で働く四大は、人体の液体部分を支配するということであろう。

現代的感覚で言えば人体に最大の影響を与えるのは太陽である。太陽は1日のリズムを作り、四季のサイクルを生む。さらには空気を暖め人間が生存できる温度を調整し、草木を育て、それにより総ての獣を育んでいる。

次に大きな影響を与えるのは月である。地上に最も近い天体である月は、人間の夜の心、闇への恐れ、無意識の領域に巨大な力を振るった。月の満ち欠け、いわゆる28宿は1ヶ月の太陰暦の周期を作り、人々の心に大きな揺さぶりをかけると同時に、地球をも揺さぶっている。海の潮の満ち引きは月の引力の方向変化、潮汐力による。地球位の巨大な物体に対しては何メートルにも及ぶ海面の上昇下降を引き起こすが、人間サイズの物体にも微小ではあるがこの力は働いている。潮汐力は、人体の98%を構成する水も動かす。人は引き潮のときに臨終を迎えるという言



(1) 筆者は大学生の頃に、フランスのパリ郊外の城内に展示されていた原本を見てきた。この著名な図版は「占星学的人体図」と呼ばれるフォリオ14vである。図版の解説については、カザルを参照されたい（レイモン・カザル『ベリー侯の豪華時祷書』中央公論社、1989年、62頁）。

い伝えがある。今のように夜空の輝きが人工の光でかき消され、星が見えない時代と異なり、19世紀までは、夜空は想像を絶する豪華な輝きで人間を圧倒していた。今でも、街から遠く離れて、晴れた星空を見上げると、中世人の感動を共有することができる。人間への星の影響は、このような天に対する感受性と不可分に結びついていた。

その他の星は文化的影響力を及ぼす。戦場で火星の赤い輝きを見て慄く者もいるだろうし、明けの明星を見て野良仕事に出る農夫もいるだろう。しかし、土星がどれか見分けもつかない者が大半なのだから、星の物理的影響力は微細なものであろう。

秘教的概念での星の影響はまた別である。《黄金の夜明け》団の解説によれば、人間は生誕の瞬間から繭のような鏡に取り巻かれている。かれを包み込む《感覚の天球》は、受胎と生誕の瞬間の宇宙の実貌を焼き付けられており、それが本人の傾向を決定するのである。この《感覚の天球》は、《宇宙を映す魔法鏡》とも呼ばれている。その表面には、隠された宇宙の諸力が投影されている。天球から外側と内側を見ると、外宇宙に対しては凸面鏡、内包された人間に対しては凹面鏡となる。⁽²⁾

人間はこの《感覚の天球》のなかに、誕生と受胎の際に上昇していた黄道十二宮の一点、つまり、ASCの方角を向いている。この天球は人体の周囲を回転しない。

しかし、これが絶対不変の運命や、宿命と違うことは、既に『魂の西欧占星術』（鏡リュウジ著。学研）を読んだあなたは理解しているだろう。星の配置は、あなたの行動や心理の奥底にあるものを読み解く鍵であるが、絶対的なものではない。

(2) イスラエル・リガルディー『黄金の夜明け魔術全書 上』国書刊行会、1993年、143頁。

2 身体と宇宙の照応に関する歴史的考察

少々ややこしくなるが、最初に人体における右と左について論じる必要がある。

伝統的なユダヤ教では、右側が上位で、左側が下位に位置づけられる。それは大地の北と南の方位に関連づけられ、右側が太陽に溢れた明るい方位に、左側は寒々とした暗い方位にあてられた。神殿の儀礼においては、犠牲や薫香を捧げる神官は右手で行う必要があった。

ユダヤ教カバラにおいて「右側 (Sitra di-yemina)」と「左側 (Sitra di-sem'ala)」の区分は非常に重要である。その際、左側をより発展的に把握している。書物の律法は右側、口伝の律法は左側、この世界は右側、来るべき世界は左側である。⁽³⁾

さて、キリスト教文明においても、右と左は、個別ではなく集合的に意味づけられた。

人体は、ほぼ左右対称である。心音は身体の左側から響いてくるが、実際には人体のほぼ中央やや左側にある。この人体に大宇宙を螺旋状に重ね合わせるとどうなるか？

コルネリウス・アグリッパは、かれの『隠秘哲学』第1巻22章で、人体の器官と7惑星の相関について次のように述べている。

惑星	頭部7穴	影響を及ぼす人体の器官
土星	右耳	肝臓、胃の筋肉部分
木星	左耳	腹腔、臍、肋骨、胸、腸、血液、腕、右手、左耳、自然の力
火星	右鼻	血液、静脈、腎臓、胆嚢、臀部、背中、射精機能、癩癧の力
太陽	右目	脳、心臓、太腿、骨髓、右目、舌、口及び他の感覚器官、手足、脚、神経、想像力、
金星	左鼻	腎臓、性器、子宮、精液、情欲の力、筋肉、脂肪、腹部、胸臍、性欲を刺激する部位、秘教的には背骨、腰、頭及び口
水星	口	脾臓、胃、膀胱、子宮、右耳、常識を司る部位
月	左目	全身に影響する。特に示すとすれば、脳、肺、背骨の骨髓、胃袋、生理的排泄器官、左目、増大する力

(3) Joseph Jacobs and Judah D. Eisenstein, " Right and Left, " in *The Jewish encyclopedia*, Vol.10, New York: Funk and Wagnalls, 1901, pp.419-420. This is also available online in <http://www.jewishencyclopedia.com/index.jsp>

同じく同書第1巻52章では、7惑星と人間の仕草や外観の関係について、次のように述べている。

惑星	仕草と外観	身体的な特徴
土星	憂鬱、胸や頭を打つなど悲哀の情を示す、跪く、下を見つめて凝固するなどの宗教的仕草、祈り、嘆き	黒色及び黄色。貧相な、鉤鼻、荒れた肌、静脈が浮き出た、毛深い、小さな目、眉をひそめた額、薄い顎髭、厚い唇、地面を見つめた目、重い足取り、足を引きずる、狡猾な、皮肉な、誘惑者、凶悪な人間
木星	陽気で誠実そうな外観で、信心深い、または高貴な仕草や物腰。喜びや称賛の念を表す拍手、膝を折り頭をもたげた姿など。	色白な、暗赤色。颯爽とした体格、良い姿勢、大胆な、大きな目(黒ではない)、広い瞳、小さな鼻孔、強い歯、巻き髪、顔の造作は良い配列で均整が取れている。
火星	不愉快な、敵愾心に満ちた、残酷な、激怒した外観と仕草	赤、赤い髪、丸顔、黄色い目、恐ろしくて鋭角的容貌、愉快な、勇猛な、誇り高く、悪賢い
太陽	高潔で勇敢な仕草と外観、戸外を歩く、王の前で片膝づきに跪く様子など	黄褐色。黄色と黒の中間色に赤のはね、背が低いが均衡の取れた身体、豊かな巻き毛はない。黄色の目、賢く、信心深く、称賛を渴望する。
金星	踊り、抱擁、笑い、愛想よく陽気な仕草や外観	黒く、さらに赤混じりの白になる傾向。颯爽とした体格、色白の丸顔、金髪、薄い目、これらが黒のときはより強烈である。上品な態度、誠実な愛情、親切で、忍耐強く、快活
水星	変化が激しく、素早く、多様な仕草や外観	色白や色黒にならない。長い顔、高い額、黒ではない薄い目、真っすぐで長い鼻、薄い顎髭、巧妙な長い指、精妙な審問官、変節漢、運命に関わる仕事
月	よく動く、毒々しい、子供っぽい仕草や外観	赤みの混じりの白。すらりとした背丈、特徴ある丸顔、完全な黒ではない目、眉をひそめた額、親切で、紳士的で、社交的

しかし、このイメージはアグリッパの独創ではない。かれはイタリアのルネサンス期の文化的巨人のひとりであるマルシリオ・フィチーノ (Marsilio Ficino, 1433-1499) の例に倣った。フィチーノは、かれの記念碑的作品『天界によって導かれる生について』の第18章に各天体のイメージを記録している。例えば、長寿を得るために喚起する土星のイメージとは「長寿を得るために木星が上昇し、他の星辰と吉兆の位相にあるとき、人はサファイヤに老齢のサトゥルヌスの姿を刻む。すなわち、背の高い王座か、竜の上に座し、頭を暗色の木綿の頭巾で隠し、手をかざして円形鎌か、魚をもち、暗色の法衣を纏う老人。」と記述される。⁽⁴⁾

ところが、話をさらに複雑にしているのは、フィチーノも典拠を持っていたことだ。かれは当時、広く流布していた『ピカトリクス』第2巻第10章からこのイメージを取った。すなわち、

(4) Marsilio Ficino, *Three books on life*, Ed. & Trans. by Kaske and Clark, New York: State University of New York at Binghamton, 1989, p.335.

「王座に座る鴉の頭部をもつ男性、右手にやす、左手に槍か矢をもつ。」とある。⁽⁵⁾

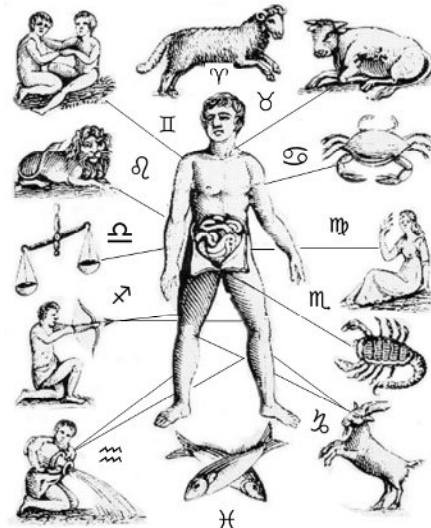
これらのイメージとは、現代魔術の用語を用いると土星のテレスマ的イメージである。

古代では惑星の影響力は決定的なものだと考えられてきた。一般的に土星が暗く陰気な性質を、木星はおおらかで陽気な性質を、火星が好戦的で、太陽は王者のごとく、金星は性愛の技に長け、水星は快活に動き回り、月は狂気を孕んだ不安定さを示していた。占星学におけるそれぞれの惑星の性質を思い浮かべながら、これらの表を見ると良いであろう。アグリッパは非常な博覧強記ではあったが、ここに並べた表が惑星の人間への影響に関する唯一絶対の真理ではない。あくまで参考と考えてもらいたい。

この二つの表を見ると、惑星の影響と言っても数学のように厳密に定義できないのが分かるだろう。同じ部位に影響する複数の惑星があり、惑星の影響を受けた結果が、同じ言葉で表現されている場合もある。しかし、木星が血液に及ぼす影響と火星のそれが違うのは容易に判断できるだろう。金星的な親切さと、月的な親切さは違う。それぞれの説明文、特に身体的特徴の項目は、個々の単語を見るより、全体を読んで惑星のイメージを掴んで欲しい。

さて、黄道十二宮の各サインが人体の各部を支配するという概念もある。次に示す概念は、同じくアグリッパのものだ。おおむね頭部から、獣帯の順序に沿って足まで配置してある。それぞれのサインは、4 区分に従って四大の性質を有する。例えば、足（双魚宮、水、冷／湿）が冷たく、腹部（獅子宮、火、熱／乾）が熱い理由はその支配宮の性質によると言う。むろん、これに当てはまらないものも多い。このアグリッパの主張は、前掲書第1巻22章によると次のとおりである。

白羊宮・・・頭部と顔
金牛宮・・・首
双子宮・・・腕と肩
巨蟹宮・・・胸部、肺、胃、腕
獅子宮・・・心臓、胃、肝臓、背中
処女宮・・・腰と胃の底
天秤宮・・・腎臓、大腿部、臀部
天蠍宮・・・生殖器
人馬宮・・・大腿部と鼠蹊部
磨羯宮・・・膝
宝瓶宮・・・脚部と脛
双魚宮・・・足



さて、この人体図とは別の宇宙図が存在する。それは惑星を人体に配置するものである。

もちろん、惑星の人体への占星術的影響（planetary melothesia）を示す文献は古くから存在する。プトレマイオスは、その創始者とも言われ、惑星の支配を人体の色々な場所に当てはめた。しかし、人体の固有の部位と1対1に対応させるという思想はなかった。

カバラ的解釈は別項で示すが、西欧のキリスト教神秘主義において示された図版を紹介する。

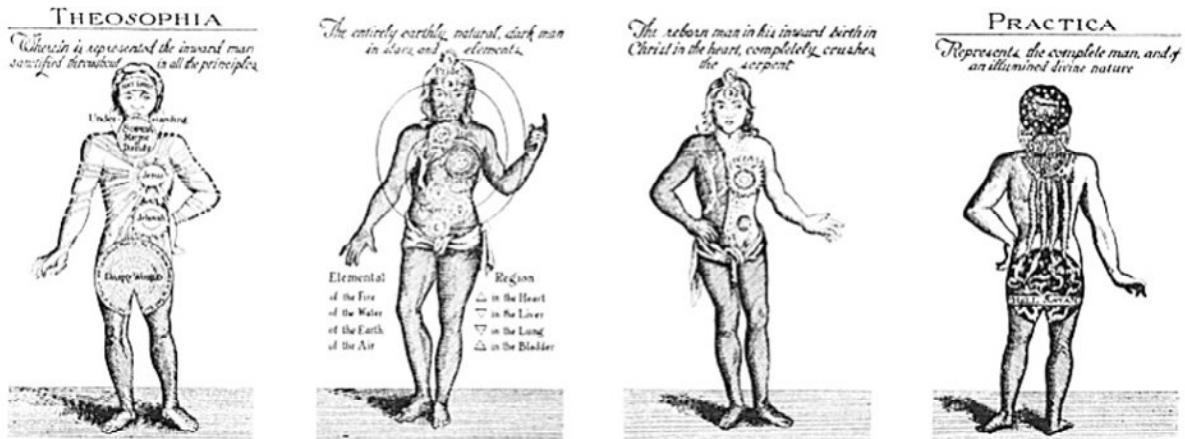
以下は、神秘家ベーメの弟子であるヨハン・ゲオルグ・ギヒテル（1638～1710）⁽⁶⁾の著した『実践的神智学』の照応である。

ヤコブ・ベーメの弟子であり、ベーメ全集の刊行事業にも携わったギヒテルはアムステルダムにおいて「忘れられた神智学者」の異名をとった人物である。

(5) Frances Yates, *Giordano Bruno and the Hermetic Tradition*, London: Routledge and Kegan Paul, 1964, pp.52-53, 70-71.

(6) 原典は死後出版の書簡集（全7巻）である。Johann Georg Gichtel, *Theosophica Practica*, Leiden, s.n., 1722. しかし、最近、英訳（部分訳）が出版された。Johann Georg Gichtel, *Awakening to Divine Wisdom: Christian Initiation into Three Worlds*, Grail Publication, 2004.

ベーメの「内的人間の三つの位相」の説明において、ギヒテルは下図を使用した。⁽⁷⁾



左から、第1図、第2図、第3図及び第4図とすると、各図版は、ベーメ学派の宇宙論のなかで人間の三つの進化段階を示している。

すなわち、第1図はすべての原理が融合した内的人間像、つまり、「楽園喪失前の人間」を表現している。

一方、地上的人間、自然的人間、そして暗き人間と題された第2図は「楽園喪失後の人間」を表現する。

最後の、第3図及び第4図が、内的生命であるキリストを心臓に宿し、完璧に蛇を打ち砕いて再生した人間、照明され神聖なる自然を宿した、「完全な人間」の前面図と背面図である。

本来なら、これらの図版はベーメの弟子たちの間で静かに流布するはずであった。しかし、インドにおける神智学運動をプロモートしたC. W. リードビーターがチャクラと関連づけたため、第2図のみが全体から切り離されて非常に著名となった。

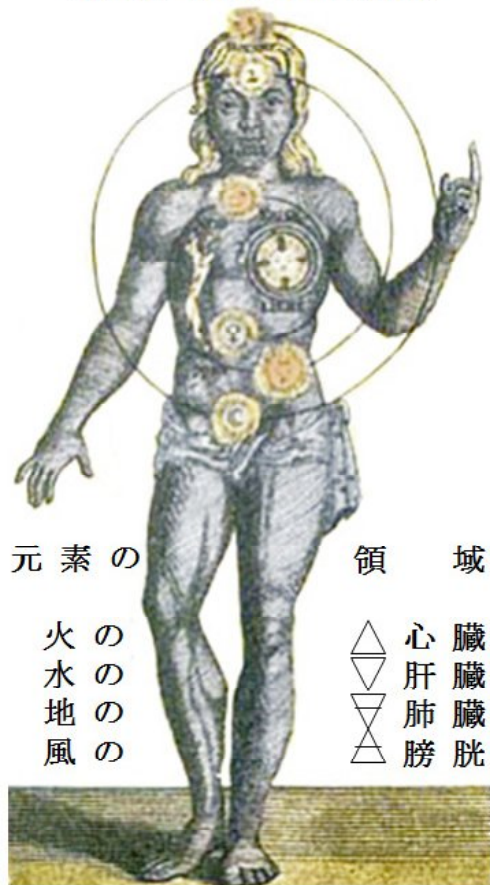
右図は彩色された第2図であるが、失楽園後の人間は、全身真黒な錬金術の黒化（nigredo）の状態にあるとされた。頭髪の色を見てもわかるように、ギヒテルは普通の黒人や、なかならずインド人を意図して描いたものではない。

その人体には、螺旋で結ばれた7惑星、心臓を取り巻く蛇と犬らしき動物が配置されている。

これらの象徴の照応は、ベーメ学派の霊視に基づくものであり、リードビーターの信じたようにインドのチャクラ論が伝播したものではない。少なくとも、リードビーターやブラヴァツキーがインドの青年を魅了した復古神秘主義である神智学から2世紀は遡る図版である。

螺旋状の曲線は、頭頂の土星に始まり、生殖器の月、眉間の木星、脾臓の水星、咽喉部の火星、

星辰と元素の中にある 大地たる暗色の自然人



(7) 正確に言うとはギヒテルの原板の模写図である。この図版は、ウィリアム・ロウの『ヤーコブ・ベーメ全集』から転用している。

臍部の金星、最後に心臓の太陽を結ぶ。

太陽が置かれた心臓は蛇に取り巻かれており、金星と火星の間の右前胸部に頭を上にした犬に似た動物が駆け上ろうとしている。

図版の下部に元素の領域が指定されており、火は心臓、水は肝臓、地は肺臓、風は膀胱と読める。この帰属は、ベーメの『アウロラ』に準拠している。身体の熱を表現する心臓に「火」を、天と地の影響力が相互作用する膀胱には「風」を、ベーメは肝臓には生命を司る体液である血液をあてたが、ギヒテルは「水」を照応させた。肺には「地」をあてている。確かに解剖学的に見た静止状態の肺は、地に帰属してもおかしくはない。駆け上ろうとする犬に似た動物は、自然界から流入する非知性的な諸力であろう。

さて、各惑星は太陽を中心に対局の惑星が上下にバランスされている。収斂性をもち、外的自然に制約をもたらす「土星」は人体の一方の端である頭頂に置かれる。対極にあるのは「月」である。拡大する光の限界点を示す「木星」は、額の第3の目の位置にある。その対極にあるのは光の拡張を収斂させる「水星」である。さらに、「火星」の怒りが光の拡張を抑制する。穏和な知性を代表する「金星」を通過して螺旋は心臓の「太陽」に到達する。しかし、心臓は蛇に取り巻かれている。

この蛇の頸木は、前出した7惑星の宿る「黒き人間」の霊的中枢がすべて活性化されたとき克服される。心臓にイエス・キリストの神聖なる性質、霊的太陽が宿り、かれは「完全な人間」へと進化を遂げる。⁽⁸⁾

7惑星の活性化の方法論はベーメ学派の神学を研究する機会に譲るとして、ここではギヒテルの図版の歴史的影響力を把握しておけば良いだろう。何故なら、黄金の夜明けを初めとして、魔術的カバラの照応体系のなかでは、ギヒテルの図版は採用されていないからである。

(8) UNE VOIE POUR ALLUMER LES SEPT ETOILES, Commentaire de la quatrième planche de la Theosophia Practica de Gichtel, <http://membres.lycos.fr/cirem/macon/7etoiles.htm>

3 光体と生命の木

人間の肉体から放射されている炎をオーラと呼ぶことがある。オーラの存在についてはキルリアン写真の実験などで劇的な紹介をされたが、本来珍しいものではない。第1章の《実践講座》でスメヒ・アーヒトの訓練をした者のなかには、自分の指先から僅かに視線をずらすとオーラが震える光として見えるのを感じた者もいるだろう。

これはあなたの肉体から磁気的な光が放射されているだけで、まったく物理的な現象だ。オーラに含まれるのは生物の生命力である。このオーラを包みこむようにして、「光体」が存在する。光の身体とは、人間の意志や精神機能までを含有する精妙な実体である。

インドの先賢シュリ・オーロピンドは「霊的存在 (Psychic Being)」と呼んだ。

しかし、光体にはギリシャ語のアウゴエイデス (αυγοειδης, αυγοειδι, Augoeides, Augoeidii (複数形)) という名称が相応しい。その意味は「アウゲ (光、αυγη) の形態を保持する者」である。⁽⁹⁾ ピュタゴラス派や、その他の秘教団体においてアウゴエイデスとは、人間の霊魂を運ぶ最も精妙な乗物であり、しばしば、神聖なる自己そのものと同一視された。

『魔術パピュルス文書』における「秘密の名前の主への賛歌」(PGM XXI. 1-29) は、アウゴエイデスを指すと言われる。⁽¹⁰⁾



伝統的カバラにおいては、光体を^{ツェレム} (ツェレム) と呼ぶ。ツェレムとは、本来は「かたち」という意味である。『ゾーハルの書』においては、聖書の次の件が引用される。「エロヒムは人間をご自身のかたち (צלמנו) に創られた。」(『創世記』1章26)

この『ゾーハルの書』(主として『老翁』の章)のなかでは、人間の霊魂はネフェシュ、ルアク、ネシャマーという三層構造になっており、死後の懲罰は下層の霊魂であるネフェシュにとどまり、その一部がルアクに波及することはあっても、神霊に等しいネシャマーに及ぶことはないとされた。しかし、この説明でも、マニ教(主としてカタリ派)の影響を受けた輪廻転生論における最大の疑問、個々の人間の同一性の原理 (principium individuationis) を解き明かすには至らない。人間が生まれ変わるとすれば、その個性、特質のどの部分が不変の<われ>として時のなかを転生していくのだろうかという疑問である。

同一性の原理に対する深刻な衝撃を与える神秘体験に、自分のセルフ・イメージを見るというものがある。欧米では、自分の姿(ドッペルゲンガー)を見るのは死の前兆とされるが、この体験はユダヤ人カバリストとっても深刻なものであった。あるアブラフィアの弟子が書いている。

「ある日、座してカバラの秘密の知識を書き写していたとき、目の前に自分自身の<似姿>がたっているのを見た。そして、その姿が消え去るまで、筆記することをやめることができなかった。」(『秘密の薔薇』キエフのモセス・ベン・ヤコブ編集によるカバラ小論集。1509年成立の写本。)

(9) G. R. S. Mead, *The Doctrine of the Subtle Body in Western Tradition*, pp.56ff.

(10) Hans D. Betz, *The Greek Magical Papyri in Translation*, Chicago : University of Chicago Press, 1986, p.259.

アラビアで花開いたネオ・プラトニズムの用語のなかに＜本然の性＞というものがある。これは人間の個人的ダイモン、黄金の夜明け団の言う＜天才＞（genius）である。12世紀のヘレニズム魔術集成の書『賢者の目的』（アラビア語原典『グハヤート・アル・ハキーム』、ラテン語訳書『ピカトリクス』）には、秘儀の学徒の前に出現する案内者が「われは汝の本然の霊、われに会わんと欲すれば、わが名を呼べ」と語っている。⁽¹¹⁾ これは『ギリシャ・エジプト魔術パピルス』において、「自然の測り知れざる父」と呼ばれた自己霊と同じものである。本然の性は、四つのプネウマ、または霊的存在に分割される。

同じくヘレニズム魔術の書物である『ミトラ祈祷書』においては、＜全き物質＞という名称で同じものが語られる。「わが生成の原初の生成よ。わが起源の原初の起源よ。・・・汝、わが身の＜全き物質＞よ。」⁽¹²⁾

また、プロティヌスは『エネアデス』第4巻第8章において、「わが内部に入り込む。」という表現で没我の神秘体験を表現している。

ラビ・モーセ・イザーレスは、『エゼキエル書』などにある人間の姿をした霊的知覚に触れて、次のように語る。

「預言者は、神聖なる栄光（カヴォド）を人間のかたちに見た。そのかたちは、預言者自身の姿を象っていた。・・・下なるアダムは、上なるアダムの王座であり、物質的な四肢は上なる霊的な四肢の象りであり、・・・『人をわれらの姿に創らん。』（『創世記』1章26）とは、天上の霊的人間の＜姿＞についてであり、預言者は肉の身であるから、預言の瞬間には霊的存在に近づき、外界への知覚が消失し、人間の＜姿＞を見るときは、自分自身の姿を鏡のなかに見るように見るのである。」（『トーラス・ハ・オラー』1569年プラハ）

また、11～12世紀のドイツのタルムード大学の指導者ハシド・ユダの弟子で、神秘的な伝説の多いヴォルムスのエレアザル（ラビ・エレアザル・ベン・ユダ）が人間の元型的靈魂（デムース）としての個人の＜星＞について、次のような興味深いコメントを付している。

「誰もが上なるかたち、個人の＜星＞を導く天使をもっている。かれが下界に降りるときは、天使は下界の人間の姿を纏う。・・・つまり、『主は自らの姿に象って人間を創造した。神のかたちに人間を創造した。』（『創世記』1章27）ここで『かれの姿に象って／神のかたちに』と繰り返されるのは、ひとつは人間のかたちであり、もうひとつは人間を象る天使存在のかたちだからである。」

ラビ・エレアザルはこの理論を発展させ、人間には誕生の瞬間に＜神のかたち＞（אלהים）としての天使存在が刷り込まれるのだと結論した。イアンブリコスとは、このような個人の天使は、召喚できると語ったが、エレアザルはその魔術的用法については否定した。ところが、後世に偽書の形で有名な書物が流布することになる。

それは『ヴォルムスのユダヤ人アブラハムが息子ラメクに伝承した秘密の魔術的实践』という長々しい名前で、一般には『術者アブラマリンの秘密の魔術書』として知られた著名な天使魔術の書物である。⁽¹³⁾ ここでは任意の天使存在を召喚する技術が語られている。⁽¹⁴⁾

ここまでの経緯をまとめるとツェレムとは、＜本然の性＞、＜個人的ダイモン＞または＜守

(11) PICATRIX The Latin version of the Ghayat Al-Hakim, London: The Warburg Institute, 1986, pp.109f.

(12) Hans D. Betz, The Greek Magical Papyri in Translation, Chicago : University of Chicago Press, 1986, p.48.

(13) S.L. MacGregor Mathers, The Book of the Sacred Magic of Abramelin the Mage, New York : Dover Publication, 1975, pp.xv-xiv.

(14) Gershom Scholem, On the Mystical Shape of the Godhead, New York : Schocken Books, 1991, pp.261, 313n, 314n.

護の天使>に等しく、呼べば答えるほど間近に存在しながら、自分とは異なる霊的存在を示している。

しかし、『ゾーハルの書』には、まさしく神智学者の言う<アストラル体>や<エーテル体>のような肉体より高次の<精妙体>という響きをもつ記述がある。

「人が世に生まれるときは、かれはツェレムとともに育つ、ツェレムとともに歩む。」⁽¹⁵⁾

「ツェレムは死の直前に分離する。」⁽¹⁶⁾

ヘブル語の<影> (צל (ツェル)) とツェレムの類似性から、ツェレムの外的な投影が影だと言われる。民話の影を売った男の末路がどうなるか、自己同一性を喪失して、自分の影に吞まれてしまうのである。

さらにツェレムの全体像を『ゾーハルの書』は、次のように表現している。

「聖なる意図をもって妻と交わる前に身を清める男には、男と女の組合わせの聖霊が訪れる。

神聖なる主は、誉むべきかな。主は使者を子宮に差し遣わし、これら個別の霊を指定し、身をゆだねる場所を示すのである。これが『夜は語りき。人の子は宿る。』(『ヨブ記』3章3)」の意味である。この個別の使者に「夜は語りき」、「人の子は宿る」かくかくしかじか。神聖なる主は、誉むべきかな。この霊に必要なすべての命令は下しおかれる。霊たちは、すべてを説明されている。そして、上なるお方に似たくかたち> (ツェレム) とともに、霊たちは降下していく。

・・・来たりて見よ。霊がこの世に生まれるため降下するとき、霊は地上のエデンの苑に至り、何列にも並び立つ義なる靈魂の栄光を見る。その後、ゲヒンノムに行き、誰も哀れみをかけない邪なる者たちの悲嘆の叫びを聞く。かれらの存在目的は、聖なるかたちが世に生まれる出る前に、それを見て警告を得ることだ。さて、世に生まれ出るとき、かたちがともに付き添い、ともに育つのである。従って、『確かに人間はかたちとともに歩む。』のである。人間の日々はかたちとともにあり、そのかたちによるのである。それこそ『われらは昨日でしかなく、何ひとつ知らない。地の日々は影だからである。』(『ヨブ記』8章9) われらの日々は、文字通り<影>である。」⁽¹⁷⁾

この影は、人間の生涯に繰返し<兆し>として現れる。

ツェレムに関するこの記述は、靈魂を取り巻く<衣>としてではなく、靈魂の上に立つ、または漂う存在として示されている。しかし、別の場所では<衣>としての性格が説明される。人間の受胎に関する理屈は、当然のことながらチベット仏教のものに似ている。周知のとおり、チベット仏教では中有の死が現世の誕生であり、中有に遊ぶガンダルヴァが性交中の父母の子宮にとらえられ、中有の世界で死ぬことで現世に転生してくる。カバラにおいては、すべてが神の命令により整然と行われる点は異なるが、転生する自己の肉体、靈魂、そしてツェレムの3者が性交中の子宮の上に会合する。

『ソロモン王の書』のなかで、性交の瞬間に、神聖なる主は誉むべきかな、個々の人相学上の類似した霊を遣わし、エッチングをほどこすようにそのかたちを刷り込み、性交中の上に立たしめる。もし、見る事が許されるならば、頭上に人相学の像のように人間のかたちが形成され、そのかたちのままに人間が造られていく様子を霊視することができるだろう。・・・霊が上から離れ、聖なる王の御前で自らの肉を纏い、現世に現れ出るための人相学的なかたちを纏い、その原初のかたちがツェレムに拡散する。そして、ツェレムが第3の存在として、霊につき従い、性交の瞬間に現世に現れ出るのである。もし、性交するものがなければ、ツェレムが夫婦の間に立つこともないだろう。」

(15) *The Zohar Volume 3*, London : The Soncino press, 1934, III 13b, p.41.

(16) *The Zohar Volume 1*, London : The Soncino press, 1934, I 217b, p.305.

(17) Isaiah Tishby, *The Wisdom of Zohar*, Oxford : The Oxford University Press, 1949, pp.787-788.

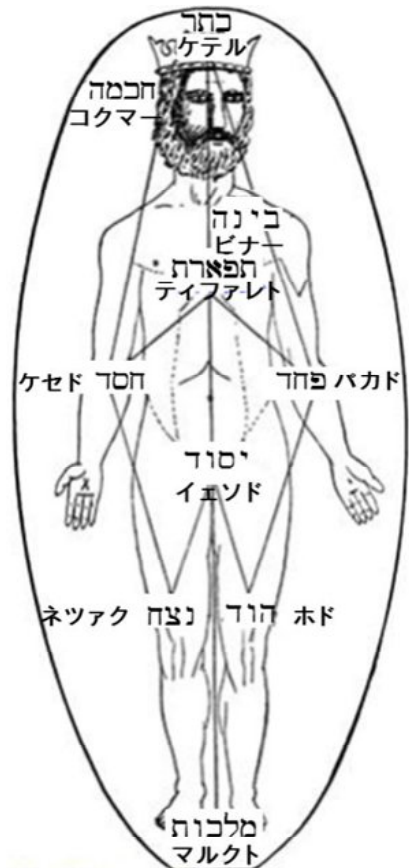
つまり、ツェレムは人間の受胎の瞬間の肉体と靈魂の仲介者であるとも言える。

ヴォルムスのエレアザルの記述を思い出してもらいたい。ツェレムが拡大して見えるかたちを結んだとき、自分自身の姿を見る神秘体験、ドッペルゲンガーに似た現象が起こる。

モーセス・コルドヴェロは、『石榴の園』（第3 1部4章）において、ツェレムは影であると断じた。何故なら人間の頭上に影を結ぶからである。ツェレムは人間のかたちに刷り込まれた靈魂の部分である。人間の三層を成す靈魂、ネフェシュ、ル
アク、ネシャマーは、それぞれ固有のツェレムをもつ。原
型のツェレムこそ、ネシャマーのツェレムであり、他のツ
ェレムは影にすぎない。そして、敬虔な思いを持てば地上
においてもツェレムを見ることができると説いた。

この理論をさらに深めたのはラビ・アブラハム・アズラ
イである。かれの『ヘセド・ル・アブラハム』において、
3層の靈魂はそれぞれの防護衣としてツェレムを纏っている。
このツェレムは、凶猛な霊やダイモーンから人の靈魂
を守ってくれる。そして、ユダヤ人、非ユダヤ人、精霊で
さえツェレムをもっているが、動物たちはもたない。アダ
ムが罪に堕ちたとき、ツェレムはかれから去った。そして、
人間の罪の大小に応じ外側に漂いながら、もし、人間が罪
を犯し続けるならば、完全に離れてしまう。それが「裸で
あることを知った。」（『創世記』3章7）という言葉の意味
である。

パラケルススは、これを星辰体（Evestrum）と呼んだ。
エバストラムは、人間の意識を持った複体のことで、エー
テルの実体で構成され、死ぬ間際や眠りに落ちたときなど
肉体から遊離して現れる。死後に現れるのは迷い出た幽霊
（Caballi）と呼んで区別された。四大を核とした肉体と、星
幽体（Corpus Sideri）を核とした「光体」は、相互に主導権
を主張する。人間が起きて働いているときは肉体と光体は
融合しているが、肉体が活動を停止、または休止している
ときは光体は肉体から遊離できる。⁽¹⁸⁾



ギンズバーク版
アダム・カドモン

魔術師は創造的想像力を用いてこの操作を行うが、それについては別の章で述べる。

《黄金の夜明け》団では、光体をより壮大で精密なスケールで把握していた。マサースは大宇宙を写す《魔法の鏡》として光体を描写する。当然ながら、大宇宙のモデルである「立体天球」と小宇宙のモデルである個々の《感覚の天球》は、《万物照応》の原理によって魔術的相互作用を及ぼす。人体を取り巻く《感覚の天球》には宇宙のあらゆるオカルト的諸力が天球に投影される形で表現されている。外宇宙に対しては凸面鏡、人間に対しては凹面鏡となる《感覚の天球》を想像しよう。下の図を参照して、卵型に人間を取り巻く光体をイメージしてもらいたい。この天球が人体を取り巻く様子は、全天球が恒星や惑星を取り巻き、星の力を映し出すのと同じである。従って、《感覚の天球》の位置配分や構造組織は大宇宙の精密な複写である。

この《宇宙を映す魔法鏡》には、10セフィロトが立体天球内の《生命の木》として投影されている。人間の肉体は天球に投影された10セフィロトの内部にあり、肉体の区分と各部は《生命の木》のセフィロトから形成されている。⁽¹⁹⁾

これは、宇宙と同大の巨人アダム・カドモンの相似形のミニチュアである。

(18) Paracelsus, "The philosophy addressed to the Athenians", TEXT XVIII - XXII, *The Hermetic and Alchemical Writings of Paracelsus the Great*, ed. by A.E.Waite, Edmonds: The Alchemical Press, 1992, pp.273-275 in Vol.2.

(19) Gershom Scholem, *On the Mystical Shape of the Godhead*, New York : Schock Books, 1991, p.45.

『バヒルの書』(第1部172節)には、次のように記述されている。
「『創世記』(1章27)に)書かれてあるごとく、神のかたちに、神を象ってかれをつくり、男と女をつくれり。そは、右足と左足、右手と左手、胴体、生殖器、頭部、である。」⁽²⁰⁾

さらに『イドラ・ラバ』141bに次のように記述されている。

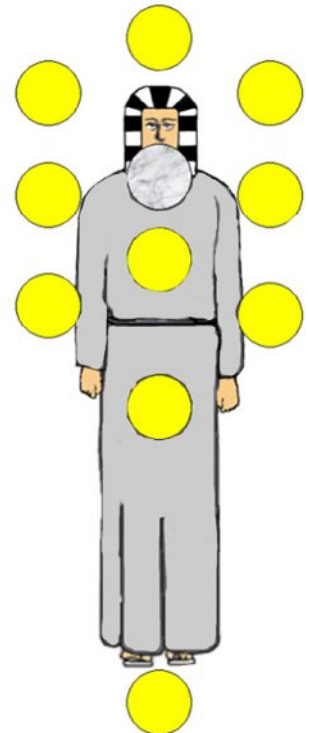
「人間のかたちは万有の表象である。すなわち、上なるもの(天界に)、下なるもの(地上に)である。聖なる古きもの(主)が、御自らのかたちから取られた故に。」⁽²¹⁾

アダム・カドモンの上にセフィロトを投影した状況は前項の図のとおり。中央の柱が身体の中心線に、慈悲の柱が右側に、峻厳の柱が左側に来る。これが伝統的な配置である。コクマーとビナーの位置やセフィロトの幾何学的配置については異論がある。特に最上部の3セフィロトについては初期には上下に配列されていたが、13世紀にダースの概念が明確化してから三角形に配置されるようになった。⁽²²⁾

この神のイメージに「対面」した神秘家は、鏡写しのように神の左半身を自らの右半身に、神の右半身を自らの左半身に受ける。従って、小宇宙の中において人間の右側に峻厳の柱が、左側に慈悲の柱が立つのである。⁽²³⁾

ケテルは頭頂にあり、強力な冠を形成する。
コクマーとビナーから脳と頭部の両側が形成される。
ケセドとゲブラーから腕が形成される。
ティファレトからは胴体が形成される。
ネツァクとホドから、両脚が形成される。
イエソドから生殖器と排泄器官が形成される。
マルクトからは、物理的全身が形成される。

肉体を形成する低次靈魂は、洗練された《星幽光》からなる精妙体であり、これを不可視の枠組みとして、肉体がその上に展開される。この低次靈魂は物質的体を通して輝き、《魔法鏡》すなわち《感覚の天球》を形成する。肉体と《感覚の天球》の境界の隙間には、星幽界のエーテルが充満している。つまり、この卵型の空間は大宇宙の《星幽光》の容器ないしは受容者である。



(20) Trans. by Aryeh Kaplan, *The Bahir*, York Beach : Samuel Weiser, 1979, pp.65f.

(21) Louis Ginzberg, " ADAM KADMON, " *The Jewish encyclopedia*, Vol.1, New York : Funk and Wagnalls, 1901, p.183. Also available on, <http://www.jewishencyclopedia.com/index.jsp>

(22) Gershom Scholem, *Kabbalah*, New York : A Meridian Book, 1978, p.107.

(23) Israel Regardie, Ed. by Chic and Tabatha Ciceros, *The Middle Pillar*, St. Paul: Llewellyn Publications, 2000, p.184.

4 生体磁気

人間に影響する自然力のなかで、磁気の影響が最も不明確である。自然に存在する磁気エネルギーは、太陽の光や熱に比べると遥かに低いレベルにあり、そんなものは生物に影響しないと考えられていたからだ。しかし、地球は巨大な磁石であり、我々は生まれる前からその磁界のなかに住んでいる。動物のなかでも渡り鳥は地磁気を感じる何らかの感覚器官を持ち、その生体磁石を用いて飛行方向を知ると推測されている。磁気には鈍感な人間でさえ、現代人の肩凝りの原因のひとつが、環境磁場の減衰だと考えられている。磁場を短絡させる鉄筋コンクリートの家屋に住み、金属の機械を使う人間には特にその傾向が顕著だと言うのである。この種の生体と磁気に関する医学の分野を磁気生体学（Biomagnetism）と言う。しかし、磁気の影響は随分古くから研究されてきた。現代の学問ではその真価を否定された形になっている生体磁気の術（Mesmerism, Magnetism）がそれである。

「メスメル」の創始者フランツ・アントン・メスメル（1734～1815）は、ドイツとスイスにまたがるコンスタンツ湖（ボーデン湖）のドイツ領岸の小村イツナングにおいて、下層階級に属する狩猟頭の俵に生まれ、その利発な才能を父親の主人であるコンスタンツ大司教に見いだされ、18歳にしてイエズス会の神学校に入校し、続いて1760年にはウィーン大学に入校、神学、哲学、法学、医学の博士号を取り、その才能を開花させた。当時の偏見ある見解が多く伝えられてメスメルは詐欺師であったかのように誤解されているが、かれは当代一流の学者であったのだ。



かれが所謂「磁気施術師」の祖となる契機は、1773年に27歳のエスターリー嬢を治療したときからだ。彼女の症状が天体運動のように周期的に変動することに気付いたメスメルは、英国における磁石治療の応用を試みた。

鉄を含有する薬を飲ませ、患者の身体に磁石を張り付けた。患者は、不思議な流体が自分の肉体を通過するのを感じ、数時間の間に症状は消失した。メスメルは、この1774年7月28日を「歴史的な日」と書き記し、患者の言う流体に「動物磁気」という名前をつけた。

メスメルはこの発見に夢中になり、生涯を「動物磁気」に費やすこととなる。かれはパリに開院し、奇跡のような磁気治療で有名になったが、医学界は冷淡だった。

1784年に、弟子の裏切りに危惧感を覚えたメスメルは、磁気医療の技術を独占する調和協会を結成した。

しかし、ある種のお家騒動はかねてからの嫌疑を再燃させ、フランス国王ルイ16世は、アカデミーの構成員により、審査委員会を興し、動物磁気問題を審査させることになった。メスメルは調査を拒否したため、化学者、天文学者、医師ほかの有識者から構成される調査委員は、メスメルと対立する分派の磁気医院を調査した。その結果は、治療効果を肯定したが、動物磁気という流体の存在を否定し、治療効果は想像によるものと断定した。

メスメルは当然、これに反発したが、かれ自身が動物磁気を宗教的、魔術的な存在ではなく、科学的に解釈できる実在と捉えていたことが反論から鋭気を奪った。

そして決定的なことは、メスメルの忠実な弟子ピュイゼギュール侯爵（Amand-Marie-Jacques de Chastenet, Marquis de Puységur : 1751～1825）が師匠の所説に合致しない「磁気睡眠」を発見したことである。人気の衰えたメスメルは激烈な批判を受け、弟子たちにも離反され、20年間消息不明となり、各地を流転した後寂しく死去する。



不幸にしてかれの発見は、百年以上も時代を先取りしており、或いは秘められた古代の智慧に

起因していた故に、反時代者として苦杯を嘗めたのである。

かれの受難は、われわれのテーマではない。従って、これ以上歴史的事実については触れることなく、内容を検討したい。ただ、ここで直面する最大の問題は、かれの理論の正当性ではなく、メスメルが強力な自然的魔術師であったことにある。かれの生体エネルギーまたは、エーテル体オーラの放射力は常人のレベルを遥かに凌駕していた。従って、メスメルが自分自身の経験的事実として記録した「動物磁気」の影響は、かれ以外の研究者には、到底追試不可能な実験結果であった。ともあれ、精神的巨人であると同時に世紀の魔術師であったメスメルの主張する「動物磁気」は、大革命時代のヨーロッパを席卷し、様々な追従者と反対者を生んだ末に、その心理学的側面のみが開花して、現代の催眠術の母体となった。メスメルの信じた動物磁気の性質は、次のとおりである。

- ◎ 全ての生体、動物、草、樹、水、金属は磁化されている。
- ◎ この磁気は、磁気エネルギーの流体によって充電される。
- ◎ 宇宙的活力、または動物磁気は、既に磁化された肉体による直接の接触で移動する。
手で触れるだけでなく、視線を送ることや、意志の力だけでも出来る。

メスメルは、パラケルススを否定しながら内心は心酔していた。パラケルススは魔術師のように言われているが、むしろ実験化学者の性格が強い人物である。当時の一流の人物は、神の顕在を前提に霊的な事象と物理的な事象を渾然一体に理解していたのである。つまり、魔術と科学は異質な視点ではなく、学問という巨大な象牙の塔の数多い部屋に過ぎなかった。その気質を継承したメスメルは、同時に星の人体への影響を論じた医学著作にも精通していた。なにしろ、医学博士号を取る前に、かれは神学及び哲学博士だったのである。「宇宙魂」(アニマ・ムンディ)が、磁氣的に人間を支配すると初期のメスメルは信じていた。

また、これは特徴的な事実でもあるが、かれはフリーメイソンの結社員であり、晩年は錬金術に深い興味を抱いていた。そして、当時の医学界には否定されたものの、絶大な人気のある《動物磁気療法》で稼いだ巨万の富を有していた。政治的に無知であったため、居住地を追われたりもしたが、《動物磁気》を唱え初めてからは、生涯金に不自由はしなかった。

そして、我々はしばしば見落としがちになるのだが、かれは音楽に関しては玄人はだしの実力を持っており、資産家の妻のおかげでウィーン時代には、モーツァルトほかの音楽の巨匠たちを後援するホストでもあった。

これらの事実が指向しているのは、多彩な能力を持つ巨人が、オカルトと心理学の境界線に属する真実を発見し、全生涯に渡ってその原理を解明しようと努力したことである。結局、かれは経験的事実を列挙するだけに終わり、オカルト的現象と、心理学的現象を分離することができなかった。それらは同時に発生していたのである。

結局、科学的研究だけで終われば「催眠術」という学問の一分野を早期に確立できたかもしれない。しかし、かれも時代の子供であり、科学という神に全面的に帰依して、それ以外の可能性を圧殺することはできなかった。

今日のわれわれとしては、メスメルの残した魔術的信仰に興味がある。ダイアン・フォーチュンは、人間の極性と人体を還流する《力の回路》について述べている。反発と吸引という磁気的な性質をもち、人体を接点として大地から湧き出す力流と天から降下する力流があるという信念は魔術のシステムにおおいに反映されたのである。

実践講座

5 視覚化の練習

魔術の基礎練習のなかでも「視覚化」は、特に個人差が激しい。生まれつき何の練習をしないでも、見たいものが見える人間がいるかと思えば、苦しい修行を繰り返しても視覚化の初歩にさえ、たどり着かない人間もいる。それでは生得の能力だから、持っていない者は諦めるのか。いや、そうではない。視覚化を習得できなかった者は、これまでの修行法が悪かったのである。

ところで視覚化とは何であろうか。英語で **Visualization** というこの単語は、ある図形や風景を直接見ていないとき、ありありと視野に（思い）浮かべる技術である。当然のことだが、聴覚化、触覚化、嗅覚化などという並列した概念も考えつくが、人間の知覚領域の大半は視覚像が占めているので、すべての知覚化を代表して、視覚化と呼ぶ場合が多い。本書でもそのように用いる。つまり、視覚化するときは、必要な音、匂い、振動、場合によっては味覚や肌触りも含まれるということだ。

そして、本来、この能力に神秘的な要素などかけらもない。人間の脳が自然に備えている機能のひとつであり、脳の正しい使い方をマスターすれば、自ずと実現できる性質のものである。

さて、イメージ心理学では、視覚像を次のように分類している。

知覚像	「見る」という知覚刺激によって生まれる視覚像。当然、見ている間だけ存在する。
残 像	知覚刺激を取り去った後も、なおその興奮が残り、生まれる視覚像。 原刺激と同じ色調や明暗が現れるのを「陽性残像」 明暗が逆になり補色の色調が生じるのを「陰性残像」
直観像	知覚刺激を取り去った後も、相当長い時間持続する視覚像。消したり、つけたりできる場合もある。
表象像	知覚刺激がなくても想像力で形成できる視覚像。記憶像の再構成や、身体内部の状態変化を表現する視覚像さえある。

どの人間にも程度の差こそあれ、この区分は存在する。しかし、文明人より未開人。成人より子供、理性的な人間より肉体的な人間に多く存在し、残像や直観像の残る時間も長いことが実験で観察されている。また、これらのイメージはそれについて考えると崩れてしまう。入出眠時の曖昧な状態に強く発現することなどが観察されている。

心理学から1歩引いて、実践魔術の立場を取るならば、視覚化の練習についてあれこれ悩むこと事態がナンセンスである。「思い悩む」という行為は、思考機能を用いており、そのため視覚化の原始的な直観機能を阻害しているのだ。ここまで言えば方法は臍げに理解されてきたことだろう。まず、リラックスすることだ。そして、あらかじめ定めたテーマに意識の焦点を当てる。しかし、考えてはいけない。生き生きと思い描くだけである。

テーマの選び方は、自分に身近なものから始める。最初に薔薇十字のようなものを選ぶのは良くない。例えば、自分のお気に入りの湯飲み茶碗（マンガの入ったマグカップは適当ではない）できれば焼き物のぐい飲みあたりが良い。それを手に取って三十秒程度、見つめる。そして、茶碗を机に置き、目を閉じて茶碗が手の上に乗っているように「ありありと思い浮かべる」のである。その色、形、模様の光沢、濡れた内側の曲線、手の上の重み、堅い触感、冷たい手触り、場合によっては煎茶の残り香など。あなたの五感が捕らえて記憶も生々しいイメージすべてを再構成するのである。

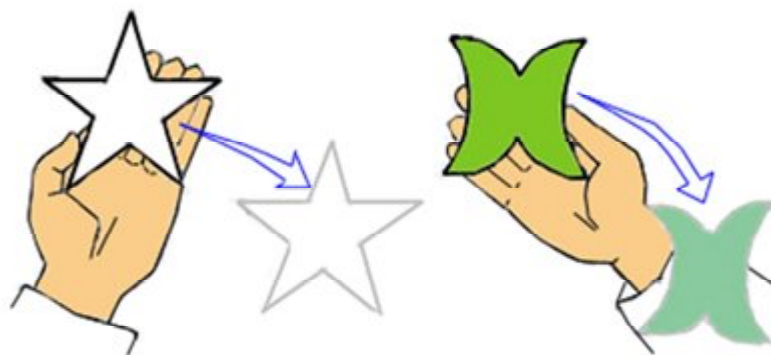
これを色々なものでやってみる。キムのゲームのときは、鉛筆、ケシゴムなどを個々のものとして捕らえたが、今度は、ひとつの物を豊かなイメージのなかに埋め込んでしまうのだ。慣れてきたらどんなものでも再構成できる。しかし、絵やイラストは最後にした方が良い。それは「映像を」を捕らえる訓練であり、視覚化とは些かずれてくるからだ。

この直観像の訓練に慣れてくると、原型のないもの。すなわち、そこにはないものの視覚像を作り出す訓練に移行する。それは表象像の訓練になる。例えば、駅のベンチに座りながらショートケーキを細部に至るまで正確に作り上げて、その瑞々しいイチゴに齧りついた様子をイメージする。甘いクリームの味覚まで舌のうえに再構成できれば成功だ。むろん荒焼き煎餅の香ばしい匂いでも良いし、駅のホームから想像力の釣り糸を垂れて、石鯛のアタリを視覚化しても良い。

6 図形応用法

第1の方法 前半部

- ◎ 白または色付きの厚紙を、何等かの幾何学模様（三角形、五芒星、その他なんでも）の形に切り抜く。
- ◎ 最初の一週間は、一度に2、3分ずつこのカードを凝視する。
- ◎ 第二週以降はカードをしまいこみ、時間と記憶力の許す限り、目を閉じてカードのことを思い出す。その細部に至るまで、脳裏に描き出すこと。
- ◎ 急ぎ過ぎないようにすること。常に、意志力の行使として慎重に視覚化を行う。創造的な想像力は、行き当たりばったりの産物ではない。強い意志力が大切だ。
- ◎ カードのイメージを、明瞭に心の中に構築出来たと確信したとき練習の後半に進みなさい。

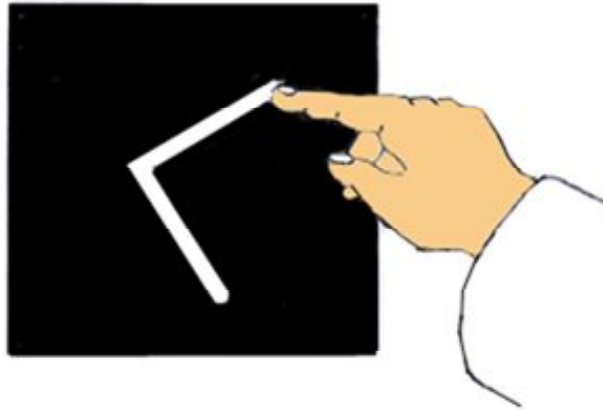


後半部

- ◎ 時間と記憶力の許す限り、目の前約60センチ位の所にカードがある様子を視覚化しなさい。
- ◎ この時、体は椅子の上でリラックスしていること。カードのイメージは目の高さに形成する。初心者には難しいが、ここで期待されるのはメンタルなイメージであり、物質的なビジョンでは無いことに注意しなさい。
- ◎ この課題を止めるときは、必ず心の中のイメージを消去すること。これは、非常に大切な手続きである。
- ◎ この基礎的な技術は将来、精神の目で見たり、想像力を強く働かせるときに必要になる技である。

第2の方法 前半部

- ◎ 60センチ四方の黒い厚紙を用意する。
- ◎ なるべく、単純な線で作られた図形を選び、その図形を指で厚紙の上になぞる。厚紙に指が触れないこと。
- ◎ 指が厚紙の上を動くにつれ、チョークで線を引くように白い軌跡が黒一色の厚紙の上に引かれる様子を視覚化する。白線が、指が図形を描き終わるまで持つように訓練する。これを達成すると、図形は白く浮き上がる。
- ◎ 逆の動きで、肉体的にも、精神的にも図形を抹消する。
- ◎ 常に意志力のなせる技として、イメージを構築すること。
- ◎ 約一週間、毎日練習した後、後半の練習に移る。



後半部

- ◎ カードをしまう。
- ◎ 空中に自分の指で単純な図形を描く。
- ◎ 肉体がそれを描くと同時に、精神も参加させる。
- ◎ 逆の動作で、肉体的、精神的に図形を抹消する。
- ◎ 各段階に、違った単純な図形を用いてみる。

7 魔法鏡とオーラ

魔法鏡 (Speculum) を用いる霊視の技術は、水晶球凝視や湖の表面 (水鏡) を用いた透視などの技術と同じ理論的背景をもつ魔術の技法である。その特徴は、反射光を用いて曖昧な輪郭の透視像を得ることにある。むろん、鏡のうえの朧な影だけでは明瞭なメッセージにはならず、その影から霊的知覚像と言うべきものを導き出す精妙な操作が必要である。これは明らかに内的作業であり、この霊的知覚像を頭のなかにとどめること。または、閉じた目の裏側のスクリーンにその輪郭を描き出すことができねばならない。

一連の異界探訪の記録として名高い『霊視と幻聴』において、アレイスター・クロウリーは、薔薇十字の紋章を想起させる、六つの正方形からなる朱色の木製十字架にはめ込まれた黄金のトパーズを用いている。かれはそれを握り、トパーズを凝視したのだ。

魔術実践者たちにとって、宝石の使用は著しく効果的であると考えられていた。しかし、本物の水晶や緑柱石などを用いた純正の水晶球は高価に過ぎる。幸いにして、経験によると何ら高価でないあらゆる光ものが魔法鏡として使用可能であり、成果を得ることが出来るということが判っている。

水晶球や魔法鏡を用いる場合は、霊的知覚像はその光る表面または内部に投影される。歴史的に見ても魔法鏡は、重要な神託を得る手段として用いられてきた。ナルキュソスが水面を見て魔術的呪縛のなかに陥った神話は有名である。中東では鏡を魔術に用いており、西欧では磨きあげた金属の板、しばしば、剣の刃を見つめる魔術が発達した。ウォリス・バッジによると、カバラの修法者は7種類の金属で魔法鏡を作った。すなわち、太陽の鏡を黄金で、月の鏡を銀で、火星の鏡を鉄で、水星の鏡を水銀で、木星の鏡を錫で、金星の鏡を銅で、土星の鏡を鉛でそれぞれ作成し、対応する曜日にはその惑星の鏡を用いたのである。⁽²⁴⁾

魔法鏡の使用目的は、次の五つに分類できる。

- ◎ スクライニング。いわゆる透視。
- ◎ 他の霊的知性との通信。ジョン・ディーがケリーの水晶凝視から得たもの。
- ◎ アストラル領域への門として用いる。
- ◎ 魔術的意志を投影する手段として用いる。
- ◎ 特定の霊を補足し、ある魔術目的に奉仕させる間に保持する器として用いる。

初期の魔法鏡は水鏡であった。古代世界においては占法として確立しており、統治者の中には高価な聖餐杯を使用していた者もいる。オマール・カイヤームの『ルバイヤート』に登場するジャムシードの「七つの輪を持つ杯」や、「主がお飲みになり、そして正にこれによりかれは予言した。」(『創世記』第44章)とされるエジプトのヨセフの銀杯などが有名である。

伝統的なユダヤ教カバラの継承者たちは、水と油を入れた鉢を用いて透視術を実践した。13世紀の魔術の熟練者として伝説の多いハシドのユダ (ユダ・ベン・サムエル) は、父親と上記の鉢を覗き込み、その表面に陽光が反射し世にも稀な煌めく輝きが現れたとき、父親からその輝きに精神を集中し、ハシュマルの輝きを見ることを学んだと言う (『パリ写本』フランス国立図書館草稿番号850番)。

高名な魔女、ドリーン・ヴァリアンテは古典的な大釜を使う技法について、こう語る。「鑄造鉄で作られた大釜の内側は、黒い色をしている。大釜の内部におよそ三分の二位まで水を充たしたものは、とても優れた魔法鏡となる。続いて、一枚の銀貨を水中に落とし、集中するための的を作る。わたしは、この占いのために古い3ペニー銀貨をひとつ持っているのだが、光沢さえあれば、どんなに小さな銀であろうと銀メッキのコインであろうとも関係な

(24) Sir E. A. Wallis Budge, *Amulets and Superstitions*, New York : Dover Publication, 1930, pp.489f.

い。」

水鏡は今でも有効である。水鏡は表面に不特定の波紋が生じるので、透視の際には極めて有効とされる。簡易的な水鏡の作り方は、黒い容器に、インクなどの黒い液体を半分ほど満たして行う。ただし、表面に反射像が移るので初心者には集中しづらいかもしれない。

次に用いられたのは水晶球である。

別に水晶でなくとも、ガラス球やアクリル球を用いたとしても、霊視の能力には大差はないから、自分に最適の魔法鏡が何であるかを知ることが重要な問題となってくる。

蛇足ながら《水晶球》として販売されているもの全てが本物の水晶というわけでない。時として、鑑定眼のないアンティーク業者は、違いを知らずにガラス玉を水晶球として販売していることもある。この二つを判別するのは、専門家でない限り容易ではないが、本物の水晶はどちらかというと重みがあり、触れると氷のように冷たい。頬にあててみれば、ガラスとの違いが判るとも言われている。

最近では、プラスチック製や、アクリル球の模擬水晶球が販売されているが、十分に大きい透明な球を購入するのは金銭的負担が大きいであろう。

魔法鏡を金属で作るのは最も確実な方法である。七種類も分ける必要はなく、銀が最も有効である。可視光線の赤領域と青領域における各金属の反射率を見ると、その性能が際立っていることが分かる。特に青領域で綺麗な反射率を誇る。他の金属では深みのある青空など写すことはできないのだ。⁽²⁵⁾

銀	青領域－ 8 6 %	赤領域－ 9 5 %
銅	4 8 %	9 0 %
金	2 9 %	9 2 %
青銅	5 0 %	7 0 %

銀の板など高価でとても無理だという方には、黒鏡をお勧めする。

黒鏡の魔術鏡とは、鏡が裏どめされたものではなく、黒く塗られたガラスが裏どめされたものだ。魔術鏡の裏塗りに使用される伝統的な素材は、古い木造船に塗られていたストックホルム・タールである。このタールは、黒色で、テレピン油が蒸留した後に残る芳香性の残留物でできているためテレピン・アスファルトとも呼ばれている。

鏡は平面だけでなく、凸面のものもあり、片方が凸面ならば、もう片方は通常の平らな面ガラスでできている。凸面の鏡が、作業には最適である。

自作する場合は、懐中時計のガラス板が最も適当だが、古いレンズ・カメラのフィルターでも良い。その凸面に黒いペンキか、エナメル塗料を塗り、凹面をこちらに向けて台座に固定する。

まず、ガラスを綺麗に洗浄し、磨いた後に、黒い塗料、もしくは自分の好みの色の絵の具を3回塗る。重ね塗りする前に、前に塗った塗料がすっかり乾いていることを確かめる事が大切だ。もし、凹面の鏡が欲しいのであれば、逆に凸面を黒く塗ればよい。一回の塗装作業から、次の塗装作業へと移る前には、ガラスに手をかざし、氣息を送り、ガラスを磁気化させるように努める。

次に、自分の能力に見合う魔法鏡の額を作る。適当な大きさの四角い箱などがあれば十分だ。箱の内側に綿か、パンヤなどを詰め、鏡がしっかりとはめ込まれるように調整する。次に薄い木板か、固めの板材を四角に切り抜き、鏡の表面と同じような丸い穴を開けて、鏡をしっかりと固定した後に接着剤で接合する。未使用時に埃をかぶらないように蓋を作る。最後に箱を着色する。凝った造りが好みの者は、台座の周囲に獣帯のサインを入れ、裏面に象徴を描き込むのも良いだろう。しかし、魔法鏡に象徴図形が必須な訳ではない。単純に木製の台座の上に黒ビロード張りの台座を作っても良い。どちらにせよ、魔法鏡を作ると決めたら、細部に至るまで丁寧に作るこ

(25) Donald Tyson, *How to make and Use A Magic Mirror*, St. Paul : Llewellyn Publications, 1990, pp.22f.

とだ。それがあなたと魔法鏡の親密さを増す第1条件にもなる。もちろん、この台座は木製でも、陶器でも、金属でも良い。

現在は、様々な容器が市販されているので、鏡の大きさにピッタリ合う丸い入れ物が見つかるかもしれない。もし、そのようなものが発見できたならば、接着剤で容器の縁に鏡をくっつけ、着色した後に魔術的なシジルを書き込むとよからう。しかし、このような場合は、鏡を使用しない時に鏡が光にさらされないように、鏡を仕舞う黒い箱が必要となる。埃同様、強い太陽光線などにさらされると鏡の感受性そのものが、著しく低下してしまう。

つまり、魔法鏡ができれば、それを用いるとき以外は覆いをかけて仕舞っておく。不要な映像を結ばせないためである。そして、実際に霊視を実践する時は、魔法鏡の背後に黒い布を払げると良い。その魔法鏡を友人に見せびらかしたりしないように。

霊視の能力には、個人差が顕著であり、ある人物に最適な状態が、他人にも適当であるとは限らない。どのような状態が自分にとって最良であるかは、訓練を進め、上達していく過程で判明するだろう。まず、薄暗い照明を確保すると言われているが、人によっては照明の度合いを変えることもある。魔法鏡に光が映り、反射するからだ。この反射光は、魔法鏡の表面の中心部へ術者を導き、意識を照準する目印となるもので、「反射点」と呼ばれている。水鏡を用いるとき、水中に磨かれた硬貨を投げるのもそのためだ。

いずれにせよ、術者の熟達した技術さえあれば、道具に問題はない。つまり、一見、実際の映像が魔法鏡に現れるように見えても、この幻視は心のなかの映像にほかならないからだ。

魔法鏡を用いる前に十分にリラックスしておくこと。日常の意識と、魔術作業の間に切れ目がないと感じているなら、小五芒星の追儼儀式を行い場の雰囲気を変えておく。霊的透視の訓練は、座って行う。

魔法鏡の表面そのものを眺めるよりは、鏡の反射面、水面、又は水晶球の奥深くを見つめる方が良いのだが、まばたき一つせず魔法鏡を凝視し続ける必要はない。

まず、十分にリラックスしたならば、自分の意識を「中間状態」ともよべるような自由で漂うような状態に調節する。くつろいで鏡の表面を見つめる。そうすると意識が鏡の表面からずれてくる。すると再び、焦点を鏡に戻す。しばらくは、この繰り返しの繰り返しであろう。W. E. バトラーは、「蟻のくすぐり」という感覚について説明している。小さな昆虫が、皮膚の下を円を描いて這い回っている感覚である。それは、目の間や鼻の付け根に発生するむず痒さとして現れる。⁽²⁶⁾

そして、やがて何度かこの訓練を繰り返すと、鏡が朧な雲に覆われてくる。雲に似た不明確なイメージが浮かんでくる。それは退屈な午後の授業中に、居眠りをしかけて驚く、断片的で鮮烈な夢に似ている。目を覚ましたまま夢を見る。入夢時幻覚と呼ばれるこの現象が、魔法鏡の凝視によって生じたら、あなたは魔法鏡と対話する最初のきっかけを掴んだことになる。

さて、この段階、つかの間の幻視が得られるようになると、色々なものが見えて驚くことになるが、決して恐れてはならない。鏡のうえの存在は、夢に出てくる怪物があなたを傷つけないのと同程度にあなたへ危険を及ぼさない。

特定の霊的存在を指向した使用法等については、ここでは割愛する。しかし、最初のスクライ



(26) W. E. バトラー『オカルト入門』角川書店（角川文庫）、1927年、58、59頁。

ングの訓練が十分にできていないのに、アストラル領域への投影などに手を出しても無効であることを断っておく。

さて、魔法鏡の最初の訓練が進むと、オーラが見えてくるようになる。オーラとは、「人間や動植物或いは無生物のものからさえ流出している微細な目に見えない精気または流体」のことである。キルリアン写真などとまんざら無縁でもないが、本来は物質ではない。通常は、青白い場としてあらわれる。ヘブル語では、TzLM（ツェレム）と言う。オーラは普通、生き物を取り巻く輝きであると解釈されているが、いわゆる「死せる物質」のなかでも我々が日常感じるものとは別の生命が活動しているのである。すなわち、「生命とは鉱物のなかでは眠っており、植物のなかでは夢見ており、動物のなかでは目覚めており、人間のなかではそれ自身を意識している」

オーラの性質を神智学的に表現すると、その最初の表現は「エーテル体オーラ」となる。エーテルとは人体を還流する精気の表現であり、しばしば、インドの「プラーナ」と同一視されている。エーテル体は人体の活力そのものを表現し、太陽のエネルギーを上から、大地のエネルギーを下から吸収し、肉体組織を活性化し、その余剰エネルギーを肉体の表面から放射する機能をもつ。おおむね体表面から十数センチまで、もえる炎の形で人体を包み込むのがエーテル体オーラである。これはしばしば「鞘」と呼ばれる。神智学的な細部分割をしていけば、このエーテル体オーラの外側に、個人の霊的発展の度合いに従って、アストラル体オーラ、メンタル体オーラとより精妙な媒体のオーラが続くのであるが、ここでは上位のオーラとしてくくっておこう。エーテル体オーラが人体の輪郭を模す形態であるのに対し、アストラル体オーラ以上の上位のオーラは人体をすっぽり包み込む卵の形状を持つ。これを《黄金の夜明け》団では個人の《立体天球》と呼んだのである。アストラル成分からなるオーラは個人の感情及び情感レベルでの成熟度を表す。青白い炎を放つ人間は安定し成熟しているが赤い怒りのオーラを常に身に纏う者は感情の制御と支配が未熟な人間である。

オーラを見る訓練として最も一般的なのは、白壁や青空を背景に自分の手を見つめることである。そのとき曖昧な輪郭が肉体のそとに見えるようになる。

肉眼視は発達させるのが難しいので、もうひとつの方法は、協力者を得て手でオーラに触れる訓練を積むことだ。友人に静かに座ってもらい、その身体に沿って4、5センチ離れた曲線を手でなぞるのである。そのとき実際に相手の肉体に触れてはならない。肉体的接触は微細な感覚の把握の邪魔になる。この空間をなぞる仕草を、肉体からの距離を30センチぐらいまで離したり、再び近づけたりしながら、指先に感じる様子を克明に記録しておく。触感を用いたこの訓練では、受ける印象はばらばらである。指先に熱感を感じるかもしれないし、圧迫感や逆に吸引力を感じるかもしれない。ひやりとした感覚を受けたり、肌がむず痒くなった例もある。本来、肉体が感じない感覚を、これまでの肉体的イメージに脳が翻訳しているのである。

そして、突然、視覚領域にも異変が生じる。見えないはずのものが見えてくるのだ。これを「闇夜に黒猫を見る」というが、光のないところで物を見ることに等しい異質な視覚像が生まれてくる。

ただし、他人のオーラを見るにあたっては必ず本人の許可を求めること。個人の《立体天球》の内部は、意識するしないに拘わらず様々な想念で満ちており、プライバシーを深いレベルで傷つけることになりかねないからだ。

また、生命エネルギーの強い人間が弱い人間のオーラに触れると、過剰なエネルギーを放射したり逆に吸い取ることがあるので、そのような状況になったら訓練を中止すること。

8 ゲマトリア

(1) ゲマトリアの歴史

a ゲマトリアの源泉

カバラの数秘術は、一般に次の3種類から構成される。

ゲマトリア	גמטריא
ノタリコン	נוטריקון
テムラー	תמורה

このうちゲマトリアは特に有名であり、日本でも半可通のオカルトライターが怪しげな応用をしているが、別にユダヤ人の専売特許ではない。

最も古いゲマトリアの応用は、バビロニアのサルゴン2世である。かれはコルサバードの城壁を建築する際に、王名に等しい1万6283キュービットの長さに設定した。⁽²⁷⁾

ユダヤ人は優れた先達からゲマトリア技法を学んだのである。かれらの先生はギリシャ人であった。ギリシャでは、この技法をイソプセポス (ισοψηφος) 「等しい石」という。ゲマトリアという言葉自体は、ギリシャ語のグラマティア (γραμματεία) 「書記」からきたと言う。

我々は日常的にアラビア数字と和数字を用いているので違和感はないが、ヘブル語には独立した数詞がない。文字を数詞に用いる。その例はヘブル語の『聖書』で、『詩篇』を見てみると顕著である。『詩篇』の1章がアレフで、以下、ヘブル文字で章の標記が続き、最後の150章はコフ・ナンである。数詞としての文字は以下のとおり。

アレフ・ベートの最初の9文字が1桁の数字を表し、10番目のヨドが10を、以後、ツァディまでの9文字が2桁の数字を10刻みに示し、コフからタウまでは100刻みの3桁の数字を示すものである。

ゲマトリアの基本概念は、この数詞と文字が同一であることに起因し、単語を文字に分解し、数字に変換し、その同じ数値を持つ別の単語で置き換えることが可能であるという信念である。

b ユダヤ教聖書解釈学におけるゲマトリア

ユダヤ民族においてゲマトリアという単語が公式に使い始められたのは、ガリレアのラビ・エレアザル・ベン・ラビ・ヨセ (200年頃) によるバラティア解釈学32則からであった。⁽²⁸⁾

バラティアの第29則は「ゲマトリア：文字の数値による翻訳」であり、第30則が「ノタリコン：単語を2またはそれ以上に分割することによる翻訳」である。⁽²⁹⁾

残念ながらゲマトリアという単語は『旧約聖書』に出こない。しかし、バラティアを始めとした『旧約聖書』の解釈においては、2世紀のタンナイム期から使われている。

聖書の文中に特殊な形で明示された三つの例を示す。

その第一は、「アブラムは身内の者が捕虜になったと聞き、訓練した郎党318名を引き連れてダンまで追跡した。」(『創世記』14:14) とある郎党の「318」という数は、アブ

(27) Gershom Scholem, *KABBALAH*, New York : A Meridian Book, 1978, p.337.

(28) Loc. cit.

(29) <http://www.jewishencyclopedia.com/view.jsp?artid=471&letter=R>

ラムの郎党の中で唯一名前の判明した「エレアザル」の数値に等しい。

その第二は、モーシェがイスラエルの会衆に歌い聞かせた『申命記』32:1-6の冒頭の6文字を加算すると345 (H (5) + I (10) + K (20) + H (5) + S h (300) + H (5) = 345) であり、モーシェの数値に等しい。そして、『申命記』32:6の冒頭の文字へーが異常に大きく印字されていることが、暗号的手法の利用を明示している。

その第三は、「その3分の1は包囲の期間の終わるとき・・・」(『エゼキエル書』5:2)にある章句「包囲の期間 (ׁׁׁׁׁׁׁ ׁׁׁ) 」から、ヴァウとへーを減算すると「・・・390日の間これを食べねばならない。」(『エゼキエル書』4:9) とある数値390になる。

I (10) + M (40) + I (10) +
H (5) + M (40) + T z (90) + V (6) + R (200) = 60 + 341 = 401
そして、401 - (6 + 5) = 390

c カバラにおけるゲマトリア

前述したようにゲマトリアは神学の手法であったので、聖書を学ぶユダヤ人カバリストには必須の教養であった。しかし、カバラの実践的見地からゲマトリアを主用したのはヴォルムスのエレアザル(ヴォルムスのエレアザル・ベン・ユダ・ベン・カロニムス、1165頃-1230頃)を始祖とする。

ヴォルムスのエレアザルは13世紀のドイツのハシディズムの代表的指導者、著作家である。ヴォルムスのエレアザルは聖書の単語を反復して唱える一種のマントラ瞑想を多用し、そのなかでゲマトリア的な変換を伴う靈感を得ている。例えば、「わたしは胡桃の園に下っていった。」(『雅歌』6:11)は、「こはメルカバの深み」と変換された。⁽³⁰⁾

その後、スペインで勃興したカバラ運動においてはゲマトリアは重視されなかった。

しかし、恍惚の瞑想で知られるアブラハム・アブラフィアはゲマトリアを多用した。

例えば、アクレのラビ・イサクとアブラフィアはヤコブの梯子に着目して、次のように述べている。「父祖ヤコブの見た梯子はシナイである。この大いなる秘密はゲマトリアで解かれた。」⁽³¹⁾

アブラフィアの弟子であるヨセフ・ギカティラは、著書『ギンナート・エゴツ』においてゲマトリアの有用性を唱え、(友人であるモーセス・レオンを介して)後期の『ゾーハル』のトラクト群『ラーヤ・メヘムナ』及び『ティクネ・ゾーハル』に影響を与えた。

その後、ルリア学派がゲマトリアを多用し、以後のハシディズムの修行のなかにはゲマトリアが必ず織り込まれていく。

ゲマトリアの手法は無数に現れる。モーゼス・コロドヴェロは、『石榴の園』の第8章30節でゲマトリアを8種類に分類した。⁽³²⁾

しかしながら、現在では何百種類とある。誰かが新しい公式を開発すると、それが蓄積される一方だからだ。次項から現在でも使用されている顕著な技法について紹介する。

(30) Scholem, *KABBALAH*, p.340.

(31) Moshe Idel, *The Mystical Experience in Abraham Abulafia*, New York : State University of New York Press, 1988, pp.116, 164n.

(32) Scholem, *KABBALAH*, pp.341f.

(2) ミスパル・ラギル法

最も標準的なゲマトリアの技法をミスパル・ラギル法という。

「ミスパル (מספר)」は「数詞」、次の「ラギル (לגייל)」は「標準」という意味である。

その方法は、各単語の文字の数詞を加算して単語の数値を求めることから始まる。同じ数値をもつ単語には類縁性があると見なされる。

例えば、ルアク・エロヒムと文字シンが等価だする根拠は次のとおり。

100 = ק	10 = י	1 = א
200 = כ	20 = כ	2 = ב
300 = ש	30 = ש	3 = ג
400 = ת	40 = מ	4 = ד
	50 = נ	5 = ה
	60 = ו	6 = ו
	70 = ז	7 = ז
	80 = ח	8 = ח
	90 = ט	9 = ט

$$RVCh ALHIM = (200 + 6 + 8) + (1 + 30 + 5 + 10 + 40) = 214 + 86 = 300$$

で文字Shの数値も300だからだ。

さらに例を示せば、エイカド「単一」とアヘバー「愛」とギヘー「上昇する」は同じである。

$$\begin{aligned} AChD &= 1 + 8 + 4 &= 13 \\ AHBH &= 1 + 5 + 2 + 5 &= 13 \\ GHH &= 3 + 5 + 5 &= 13 \end{aligned}$$

(3) ミスパル・ムサフィ法

ミスパル・ラギル法では、数値の大きい文字で出来た短い単語は、数値の小さい文字で出来た長い単語と等しい場合がある。

例えば、神名ヤーウェ・アドナイ・エロヒムは、エデンの苑と同じ数値である。

$$\begin{aligned} IHVH \quad ADNI \quad ALHIM \\ &= 10 + 5 + 6 + 5 + 1 + 4 + 50 + 10 + 1 + 30 + 5 + 10 + 40 \\ &= 26 + 65 + 86 = 177 \end{aligned}$$

$$GN \quad ODN = 3 + 50 + 70 + 4 + 50 = 177$$

この矛盾を解消しようとミスパル・ラギル法に修正を加えたものがミスパル・ムサフィ法である。要は各文字の数値の総和に、単語の文字数を加えるものだ。従って、(2) 項の各単語の数値は、次のように変化する。

$$\begin{aligned} AChD &= 1 + 8 + 4 + 3 = 16 \\ AHBH &= 1 + 5 + 2 + 5 + 4 = 17 \\ GHH &= 3 + 5 + 5 + 3 = 16 \end{aligned}$$

そのため、この例においては、エイカドと同数値になるのは、4文字のアヘバーではなく、同じ3文字で形成されたギヘーである。

(4) ミスパル・ガドル法

ヘブル語には単語の末尾にくると語末形（ソフィート）に変化する文字が五つあり、その数値を別に設ける方法がミスパル・ガドル法である。

カフ、メモ、ナン、ペー、ツァダイの5文字の語末形は、右表に示すように500から900までの数値をもつ。

例えば、コクム「賢くなる」という単語の値としては、次の2種類が考えられる。

100 = ק	10 = י	1 = א
200 = ר	20 = כ	2 = ב
300 = ש	30 = ל	3 = ג
400 = ת	40 = מ	4 = ד
500 = ך	50 = נ	5 = ה
600 = ם	60 = ס	6 = ו
700 = ן	70 = ע	7 = ז
800 = ף	80 = פ	8 = ח
900 = ץ	90 = צ	9 = ט

$$\begin{aligned}\text{ChKM} &= 8 + 20 + 40 = 68 \\ \text{ChKMf} &= 8 + 20 + 600 = 628\end{aligned}$$

一般的には、前者が普通の意味を探るのに用いられ、後者はより意味を絞り込むときに用いる。前者と等価の単語カラルは「空虚、宇宙、真空」という意味であり。後者と等価の単語バルクトは「祝福」という意味である。

$$\begin{aligned}\text{ChKM} &= \text{ChLL} = 8 + 30 + 30 = 68 \\ \text{ChKMf} &= \text{BRKVTh} = 2 + 200 + 20 + 6 + 400 = 628\end{aligned}$$

従って、「賢くなることとは、己を宇宙に面して空にすることであるが、真の賢者となるためには主の祝福が必要である。」という解釈も成立する。

この複雑な技法に習熟するためには、『セフェル・セフィロト』のような数値で引くことのできる辞典を持っていた方が良い。

なお、現代の一般的な西洋魔術のテキストで紹介されているのは、このミスパル・ガドル法である。

(5) ミスパル・カタン法

これまでの技法では文字によっては数値が数百単位のため、単語の数値が非常に大きなものとなる。

そこで、ミスパル・ガドル法の各数値を最高桁の数値しか数えず、1～9までの数値にしたものがミスパル・カタン法である。

右の図表をアイク・ベカルとも呼ぶ。

例えば、「生命」と「闇」は等価となる。

1 = ק	1 = י	1 = א
2 = ר	2 = כ	2 = ב
3 = ש	3 = ל	3 = ג
4 = ת	4 = מ	4 = ד
5 = ך	5 = נ	5 = ה
6 = ם	6 = ס	6 = ו
7 = ן	7 = ע	7 = ז
8 = ף	8 = פ	8 = ח
9 = ץ	9 = צ	9 = ט

$$\begin{aligned}\text{ChIIM} &= 8 + 1 + 1 + 6 = 16 \\ \text{ChShK} &= 8 + 3 + 5 = 16\end{aligned}$$

(6) 順番号法

ヘブル語の文字は、アレフが1番とすると22文字目のタウが22番となる順番号を持っている。これに語末形のカフを引き続き23番として、最後の語末形のツァダイを27番とする順番号を整理したものが右表である。

順番号では「窪地の光」は、「彼方の五芒星」に等しいことになる。窪地の光とは、第5章で学習する獅子のカバラの用語で、崩壊した容器に注ぎ込まれた上なる光である。

19 = ק	10 = י	1 = א
20 = ר	11 = כ	2 = ב
21 = ש	12 = ל	3 = ג
22 = ת	13 = מ	4 = ד
23 = ך	14 = נ	5 = ה
24 = ם	15 = ס	6 = ו
25 = ן	16 = ע	7 = ז
26 = ף	17 = פ	8 = ץ
27 = ץ	18 = צ	9 = ט

AVRI HLL

$$= 1 + 6 + 20 + 10 + 5 + 5 + 12 + 12$$

$$= 37 + 34 = 71$$

KH MGN DVD

$$= 11 + 5 + 13 + 3 + 25 + 4 + 6 + 4$$

$$= 16 + 41 + 14 = 71$$

(7) アトバシュ法

アトバシュ (אָטבאַש) というのは第8章で詳説するテムラーの技法のひとつである。簡単に説明するとアレフをタウに、ベスをシンにという風にアレフベトを裏返す方法である。

例えばユダヤ人のバビロン捕囚をテーマとした『エレミア記』においては、殆どの記述が「バビロン」という単語が使われているが、2か所に意味不明の単語「シェシヤク」が現れる。それは、「そしてシェシヤクの王もこれを飲む」(『エレミア記』25:26)「ああシェシヤクはついに取られた」(『エレミア記』51:41)という記述である。

このとき、ShShK (シェシヤク) は、BBL (バベル) を裏返すものであるから、シェシヤクの王は、バビロンの王と同義である。

ゲマトリアに応用する場合は、文字の数値をそれぞれの組み合わせで交換する。その結果、右表のような数値が使用できる。

ここまで来るとかなり使い辛い。ということ
は特殊な解釈や魔術操作に使用されたということ
とであろう。

$$\text{ShShK} = 2 + 2 + 30 = 34$$

$$\text{MLQ} = 10 + 20 + 4 = 34$$

4 = ד	40 = י	400 = א
3 = ג	30 = כ	300 = ב
2 = ש	20 = ל	200 = ג
1 = ת	10 = מ	100 = ד
	9 = נ	90 = ה
	8 = ס	80 = ו
	7 = ע	70 = ז
	6 = פ	60 = ץ
	5 = צ	50 = ט

従って、シェシヤク (バビロン) は「打ち碎かれる (マラク)」と解釈できる。

(8) ミスパル・ハ・カドミ法

ミスパル・ハ・カドミ法も特異な技法である。
この場合、文字の数値はその直前の文字の数値との和で示されるのだ。

従って、アレフが1としたら、
ベトは、 $2 + 1 = 3$
ギメルは、 $3 + 3 = 6$
ダレスは、 $4 + 6 = 10$ と、右表のとおり。

595 = ק	55 = י	1 = א
795 = ר	75 = כ	3 = ב
1095 = ש	105 = ל	6 = ג
1495 = ת	145 = מ	10 = ד
	195 = נ	15 = ה
	255 = ס	21 = ו
	325 = ע	28 = ז
	405 = פ	36 = ח
	495 = צ	45 = ט

ミスパル・ハ・カドミ法では「修道僧」は「不毛の母」であるという解釈が成り立つ。

$$\begin{aligned} \text{GLCh} &= 6 + 105 + 36 = 147 \\ \text{AMA} &= 1 + 145 + 1 = 147 \end{aligned}$$

(9) ミスパル・ハ・ペラティ法

ミスパル・ハ・ペラティ法も特異な計算法である。

右表にあるように各文字の数値は標準法の自乗である。小さな数値の文字は扱い易いが、本来が100単位の数値をもつ文字を自乗すると膨大な数値になる。

これも特殊な用途に用いられる。

例えば、「軍隊」は「蝗」のごとし。

$$\begin{aligned} \text{GDVD} &= 9 + 16 + 36 + 16 = 77 \\ \text{ChGB} &= 64 + 9 + 4 = 77 \end{aligned}$$

10000 = ק	100 = י	1 = א
40000 = ר	400 = כ	4 = ב
90000 = ש	900 = ל	9 = ג
160000 = ת	1600 = מ	16 = ד
	2500 = נ	25 = ה
	3600 = ס	36 = ו
	4900 = ע	49 = ז
	6400 = פ	64 = ח
	8100 = צ	81 = ט

(10) ミスパル・ハ・ケラリ法

この方法ではミスパル・ラギル法の標準的な数表を使用する。

しかし、各単語の数字の和が出来た段階で、それを自乗して数値とする。

従って、単語をひとつで考えた場合はミスパル・ラギル法で同一と見なされた単語は同一である。

つまり、以前に示したように「単一」の自乗と「愛」の自乗は同じである。

100 = ק	10 = י	1 = א
200 = ר	20 = כ	2 = ב
300 = ש	30 = ל	3 = ג
400 = ת	40 = מ	4 = ד
	50 = נ	5 = ה
	60 = ס	6 = ו
	70 = ע	7 = ז
	80 = פ	8 = ח
	90 = צ	9 = ט

$$\begin{aligned} \text{AChD} &= 1 + 8 + 4 = 13 = 13 \times 13 = 169 \\ \text{AHBH} &= 1 + 5 + 2 + 5 = 13 = 13 \times 13 = 169 \end{aligned}$$

しかし、文章の解析を始めた瞬間にかなり複雑になる。

(11) ミスパル・シェミ法

この方法では、各文字は完全な綴りで計算する。

アレフは、 $1 + 30 + 80 = 111$

ベスは、 $2 + 10 + 400 = 412$

と示され、右表のようになる。

これもかなり特異な計算法である。分解するのは根気があれば良いが再構成の組み合わせが難しい。

186 = קוף	20 = יוד	111 = אלף
510 = ריש	100 = כף	412 = בית
360 = שין	74 = למד	83 = גמל
416 = תיו	80 = מם	434 = דלת
	106 = נון	6 = הא
	120 = סמך	22 = ויו
	130 = עין	77 = זיין
	81 = פא	418 = חית
	104 = צדי	419 = טית

(12) 神智学的減算法

数秘術のさらなる技法としては、神智学的減算がある。

例えば、「扉」は620の数値を持つ。

そこで、次の操作をする。

$$\begin{aligned} \text{ShORIM} &= 300 + 70 + 200 + 10 + 50 = 620 \\ 620 &= 6 + 2 + 0 = 8 \end{aligned}$$

これは、AHBやDDと同値である。

また、1次の減算でも2ケタ以上の値をもつ単語はもう一度減算すると良い。

シュシャノース「百合」を分解すると、次の二つの解が得られる。

$$\begin{aligned} \text{ShVShNTh} &= 300 + 6 + 300 + 50 + 400 = 1,056 \\ 1,056 &= 1 + 0 + 5 + 6 = 12 \\ 12 &= 1 + 2 = 3 \end{aligned}$$

これが文節の場合は、2次3次の減算が必要になるかもしれない。ただし、減算すればするほど因果関係は希薄になり意味が一般化するのを忘れてはならない。基本的には、同じ数値で組むのが原則である。

文章に適用した場合の有名な例を示す。

「見よ、3人の男がかれの傍らに立つ」(『創世記』18章2)

$$\begin{aligned} \text{VHNH ShL ShH} &= 6 + 5 + 50 + 5 + 300 + 30 + 300 + 5 \\ &= 701 \end{aligned}$$

「こは、ミカエル、ガブリエル、ラファエルなり」

ALV MIKAL GBRIAL VRPAL

$$\begin{aligned} &= 1 + 30 + 6 + 40 + 10 + 20 + 1 + 30 + \\ &\quad 3 + 2 + 200 + 10 + 1 + 30 + \\ &\quad 6 + 200 + 80 + 1 + 30 \\ &= 701 \end{aligned}$$

従って、この3人が実は誰であったかが判明する。

同様に、『出エジプト記』14章19を用いると。

そしてその 天使	エロヒムの	行きし	宿営に	イスラエルの	
V I ShO	MLAK	H AChH I M	LPNI	MChNH	I ShRAL
1 4 6	5 7 1	6 5 1	1 7 0	1 0 3	5 4 1

動きそして	かれらの前に行き	そして	柱	雲の	かれらの前を動き
V I LK	MAChR I HM	V I ShO	OMVCh	HONN	MPNI HM
5 4 6	8 6 4	1 4 6	1 2 0	8 2 5	7 8 5

立つ	かれらの後ろに
V I OMD	MAChR I HM
1 3 0	8 6 4

これに1語1語対応の変化を与えると次のとおりとなる。

最初の門	均 衡	厳肅に発音せり	棒	契約	密かに鋭く
BAA+QMA	MThQLA	NAM	ML	MNChH	ShLH+DRB
1 4 6	5 7 1	6 5 1	1 7 0	1 0 3	5 4 1

見張る者	月と太陽	帰る天罰として、避難所、信頼の	主	集合、一緒に
ShVMR	V I RCh+ShMSh	GML+ChSH	KOL	OTzH+SM
5 4 6	8 6 4	1 4 6	1 2 0	8 2 5

跳躍する、祝福する	繰り返す	展げる、虹を
ZNQ+BRKVTh	KPL	NTH+QShTh
7 8 5	1 3 0	8 6 4

「このときイスラエルの前を行くエロヒムの天使は、かれらの後ろに移った。雲の柱も彼らの前から移って後ろに立ち」という描写を次のごとく読み変えることができる。

「均衡の最初の門は、棒と契約をもて鋭く厳かに発音されり。避難所とし、天罰を加えに戻らないことを確信させるために見張る者として太陽と月を縛めた。ここに主は繰り返し祝福を与えんと、集め変貌させて虹を投げかけた」

(13) 神智学的加算法

神智学的減算の方法は先に述べたが、これの反対の技法に神智学的加算がある。それは基本となる数を序数に見立て、1から順に足していくのである。従って、

$$\begin{aligned}1 &= 1 \\2 &= 1 + 2 = 3 \\3 &= 1 + 2 + 3 = 6 \\4 &= 1 + 2 + 3 + 4 = 10 \\5 &= 1 + 2 + 3 + 4 + 5 = 15 \\6 &= 1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 = 21 \\7 &= 1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 + 7 = 28 \\8 &= 1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 + 7 + 8 = 36 \\9 &= 1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 + 7 + 8 + 9 = 45 \\10 &= 1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 + 7 + 8 + 9 + 10 = 55\end{aligned}$$

後は順に足していけば良い。20は210。300は465になる。

そのほか、因数分解的な作法もある。

ChKLL「相続」(88)を分解すると、88、77、66、55、44、33、22、11となる。

つまり、OZ「強さ」(77)、NBZBH「報い」(66)、HIM「湧く」(55)、

ILD「生む」(44)、GL「泉」(33)、ZVVG「思春期」(22)、そして

GCh「噴火」(11)という単語と関係する。

(14) まとめ

ゲマトリアはヘブル語の魔術的意味を体得する最良の学習法であり、是非実践してもらいたい。今後の魔術的な作業を考えると、ミスパル・ガドル法は完全にマスターしてもらいたい。

神智学的加算法、減算法は数字の操作であるため、比較的入りやすい。

その他の手法については、必要に応じて使用できれば良い。従って、このような多数の手法があることを理解しておくことが先決であり、必ずしもすべての技法に習熟する必要はない。

学習の参考となるサイトは次のとおりである。

- **Some Notes on the History of Isopsephia (Gematria)** John Opsopaus 1995

<http://www.cs.utk.edu/~mclennan/BA/SNHIG.html>

- **Gematria Explanations** By Dr. Akiva Gamliel Belk

http://www.bnti.us/a...class.info/dr_a's_gematria_example.html

- **Lessons of Torah Kabbalah: Introduction and Index of Available Texts**

<http://www.ruach.net/gateopen.html>

ヘブル語による計算は非常に難しく検算のために専用ソフトウェアの使用も一方である。

- **Isopsephia Calculator**

<http://www.cs.utk.edu/~mclennan/BA/Isopsephia.html>

9 フロー体験の応用

フロー理論が定義されるまでは、人が行為に没入する特殊な心理状態は「入神の域」、「忘我」、「法悦」という何かしら神秘的な行為に関係づけられた用語で説明されてきた。しかし、フロー理論は神秘的な活動ではない精神活動を描写する。フロー体験が扱うものは、マスローの「頂上体験 (peak experience)」、ド・シャルムの「原初状態 (origin)」、西田幾多郎の「純粹経験」に比肩される認知プロセスである。⁽³³⁾

しかも、特殊な才能の持主が特別に高揚した瞬間に感じるものではなく、普通の人間が頻繁に経験し、しかも深く意識しない分野であった。

本講義文書のなかにフロー理論を取り上げたのは、術学趣味を満足させるためではなく、魔術の初心者が陥りがちな錯覚に警鐘を発するためである。プロベイショナーが儀式で呪文を詠唱するさなか、強烈な没入感と多幸福感に陥る現象の幾ばくかは、フロー体験で説明できる。そもそも、人々が超自然体験だと思いこんでいることの多くは、自然現象である。その多くは感覚の門が捉えた印象を超自然的なものだと誤解することに始まるからだ。ルドルフ・シュタイナーの「超自然的感覚は認識の領域にあることの説明」を思い出してもらいたい。⁽³⁴⁾

しかし、逆に超自然的経験を得るためにフロー状態をきっかけとして利用できないだろうか。それは不可能ではない。

(1) フロー理論の発端

自分が得意なスポーツを8割ぐらいの負荷をかけてやっているとき「すべてが上手くいっている。」と覚えることがある。著者自身も、練習に集中したときは、対戦する選手の動きが自在に分かり、最適のタイミングで技を繰り出すという体験をすることがある。自分の肉体が描くべき理想的な動線が空中に糸で引かれ、その糸に操られるように身体が動いていく。

また、困難な仕事に全力で立ち向かうとき、悪戦苦闘のさなかに成功の確信が湧き上がり、仕事がスムーズに回り出すことがある。

もっと平明な例をあげると、夜9時に子供を布団に押し込んだあと、テレビの代わりにインターネットのウェブ・サーフィン始めて、夢中になってふと気づくと午前2時ということがないだろうか。このようなとき、人はフロー体験をしている。

フロー体験という概念は、ミハイ・チクセントミハイ (Mihaly Csikszentmihalyi) 教授の論文「心配と退屈を超えて (Beyond Anxiety and Boredom)」(1975年)において初めて提唱された。認知心理学チクセントミハイは、クレアモント大学院大学の心理学の教授であり、全米教育アカデミー、全米レジャー科学アカデミー会員でもある。1934年にハンガリーのフィウメ(リエカ)で生まれた(当時はイタリア領)。1956年に米国へ移住し、1970年からシカゴ大学心理学科教授、教育学科教授となった。

チクセントミハイは、長年の研究生生活を通じて、人は最も楽しいときどのように感じているか、そして、それはなぜかを追求し続けた。さまざまな活動が生み出す共通の「おもしろさ」、それがどのように「楽しさ」という経験を生み出かを考察した。

このような視点で実証的な調査を続けた結果、深い没入感と楽しみをもたらす内発的報酬のモデルとして「フロー体験 (Flow Experience)」の理論を形成するに至った。

かれはフローを「全人的に行為に没入しているとき人が感じる包括的感覚」⁽³⁵⁾と定義した。それはある物事に集中しているときに、楽しさ故にそれに完全にとらわれ、他の雑事、雑音、時間の経過をも忘れさせるほどの状態を意味する。フロー体験にあるときは、意識に入る情報

(33) 野中郁次郎、紺野登『知識創造の方法論』東洋経済新報社、2003年、50、51頁。

(34) ルドルフ・シュタイナー『超感覚的世界の認識と人間の本質への導き』イザラ書房、1977年、随所。

(35) M. チクセントミハイ『楽しみの社会学』新思索社、2000年、66頁。

は葛藤をもたらさず、意図の遂行も妨げない。心理的エネルギーはスムーズに流れ、より多くの注意と肯定的フィードバックに満たされ、より巧みに内外の環境を処理できる状態にある。

例えば、すべての懸念を忘れて登山に集中するロック・クライマー、熱を帯びてゲームに関すること以外何も聞こえないチェス・プレイヤー、無心でなめらかな動きで踊るダンサー、屋根の一部が落下しても困難な手術を続けた医者などの例をあげ、これらを「深いフロー（deep flow）」の状態とし、テレビを見る、腕の筋肉のストレッチをする、喫茶店で歓談する等々の、日常的な軽微な没入体験を意味する「マイクロフロー（micro flow）」の状態を合わせて、2種類のフローを示した。

チクセントミハイが調査した芸術家たちの殆どは、報酬のためだけではなく、仕事そのもののために、時間と労力を自分の芸術活動に注いでいた。彼らの多くは、この非日常的な経験のさ中に体験したことを説明する際、「流れている(floating)ような感じだった。」又は「私は流れ(flow)に運ばれていた。」という言葉を多用したことから、この現象をフローと名付けたものである。⁽³⁶⁾

また、フローの対局的概念として、現在の意図と葛藤し合う情報、または意図の遂行から我々をそらしてしまう情報により、意識が混乱させられている状態、意識を集中できない状態を「心理的エントロピー（psychic entropy）」という概念で整理している。

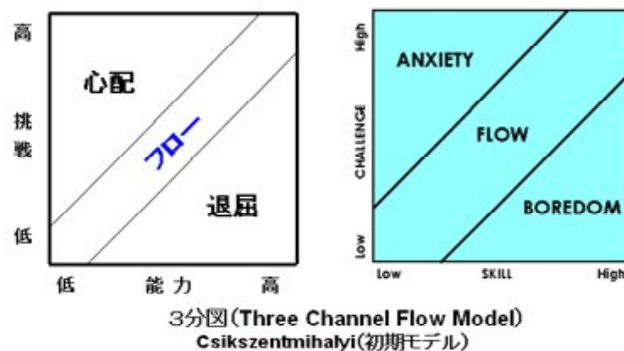
(2) フロー体験の定義

チクセントミハイがフローの概念を提唱したあと、フロー体験に関する研究は急速に進展した。チクセントミハイ自身のフローに関する定義も年とともに変化していく。従って、他の研究者の定義も微妙に異なる。

当初、チクセントミハイは次のように説明した。

「対処不能と感ずる要求に責めたてられると、その結果として不安の状態が生じる。・・・人々が行為の機会を自分の能力にちょうど適合したものとして知覚した時、フローは経験される。しかし、もし技能を用いる機会よりも技能のほうがより優れているならば、退屈が生じる。つまり、フロー活動とは行為者の技能に関して最適の挑戦を用意している活動である。」⁽³⁷⁾

この定義から、分割モデル（Flow Channel segmentation model）の最初の形態である下図が生まれる。



3分割モデル（Three Channel flow model）は、左下から右上にフロー・チャンネルがあり、このチャンネル内においてフロー状態にあるとき、人は自分の能力を最大効率で発揮しており、その状態に内発的報酬を感じる。しかし、フロー状態は動的均衡状態である。挑戦のレベルが能力を上回ると、人は警戒心をもち「不安」になる（図左上：挑戦＞能力）。能力のレベルが

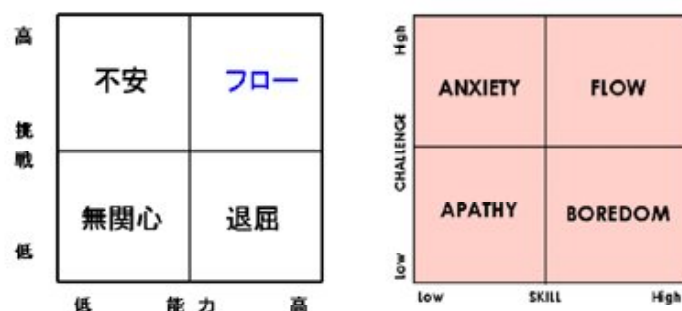
(36) M. チクセントミハイ『フロー体験 喜びの現象学』世界思想社、1996年、46-51頁。

(37) M. チクセントミハイ『楽しみの社会学』新思索社、2000年、85-87頁。

挑戦を上回ると、人はくつろぎ始め、やがて「退屈」を感じる（図右下：挑戦<能力）。⁽³⁸⁾

しかし、日常生活におけるマイクロフローまで研究対象としたところ、上記の3分割モデルでは不完全であることが分かった。日常生活におけるフロー体験のサンプリングを行うESM（Experience Sampling Method）の採用により、膨大な日常生活におけるマイクロフローの資料を収集することが可能となり、次が判明した。つまり、日常生活におけるフロー体験とは、単純に技能と挑戦のレベルが一致している時に生じるのではなく、技能と挑戦が互いに一定の水準以上である場合に生じる。

これを解析するモデルが、ジュディス・ル・フェーブルとジーン・ナカムラの4分割モデルである。



4分図(Four Channel Flow Model)
LeFevre(1988年)、Nakamura(1988年)

ル・フェーブルの定義「平均的な週間レベルの能力と挑戦の均衡の取れた比率」⁽³⁹⁾という説明は、分かりにくい、分割図そのものは平明である。

右上は挑戦と能力のレベルが高い場合で「フロー」状態にある。

左上は挑戦のレベルは高いが能力が追いつかないため「不安」状態にある。

左下は挑戦と能力のレベルが低い「無関心」状態にある。

右下は能力のレベルが高いのに挑戦が低いため「退屈」状態にある。

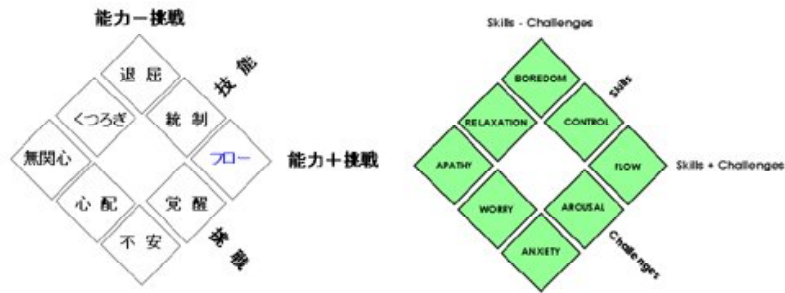
なお、より詳細なESM実験等が行われた結果、現在の4分割モデルは右下に「退屈」ではなく「くつろぎ」を置くようになっている。⁽⁴⁰⁾

1988年には、ミラノ大学のマシミニらが、挑戦と技能のレベルを細かく分類した新しいフローモデルを唱えた。これは、挑戦のレベルを「高い挑戦」「普通の挑戦」「低い挑戦」の三つに分け、また技能のレベルも「高い挑戦」「普通の挑戦」「低い挑戦」の三つに分けることによって、全体が9つのフローチャンネルによって構成されているモデルを作成した。

(38) チクセントミハイ及びナカムラ「フロー理論のこれまで」『フロー理論の展開』世界思想社、2003年、3頁。

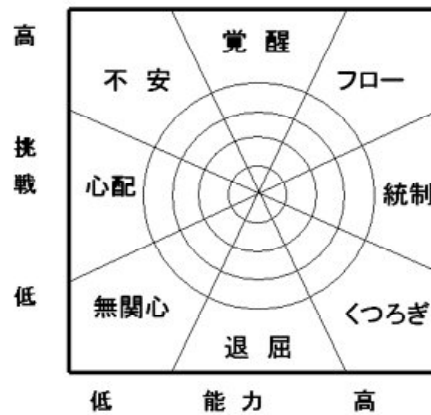
(39) Judith LeFevre, "Flow and the Quality of Experience During Work and Leisure." in *Optimal Experience: Psychological Studies of Flow in Consciousness*, New York: Cambridge University Press, p.307.

(40) 浅川希洋志「フロー経験と日常生活における充実感」『フロー理論の展開』世界思想社、2003年、189頁。



8分図(Eight Channel Flow Model)
Massimini & Carli(1988年)、Ellis, Voelkl & Morris (1994年)

これを最新の実験結果で補完したチクセントミハイの円形8分法は下図のとおりである。

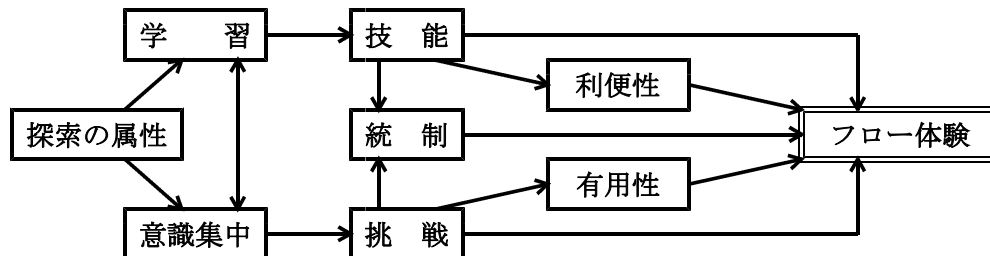


8分図(Eight Channel Flow Model)
Csikszentmihalyi(1997年)

最近の説明は、次のとおり。

「それ自体を目的として完全にその行為に没入すること。自我は喪失し、時間の流れが速くなる。全ての行為、動き、思考は必然的にその前の状態を追従する、まるでジャズを演奏しているかのように。(その行為をしている人の) 全てが(その行為に対して) 夢中になり、最大限の技能を使う。」

XY図では分からないという者には、クコーネンらの下記のフローモデルが理解の一助となるかもしれない。



(3) フロー体験をもたらす要因

フロー体験は、次の状況下において起こりやすいと言われている。

a 能力を必要とする挑戦的活動

楽しさをもたらす代表的な活動に、スポーツやゲームがある。この種の活動には必ずルールや競争状況が存在し、その活動を行うものに一定の能力を要求する。そこに発生する挑戦がフロー体験をもたらす要因となる。

スポーツやゲーム以外の活動においても、さまざまなレベルの挑戦が存在する。人は他人と話すことを楽しむが、この談話という活動のなかにも言葉の使用法、共通の関心事を取り上げるという個別のルールが存在する。ここにもフロー体験をもたらす可能性がある。

また、楽しみとは対極にあると思われる仕事にも、フローは起こる。仕事のルール、競合他社や、社内における競争、能力に対する反応が明快なことがフローを呼び起こす。

b 明瞭な目標とフィードバックがある状況

人々が特定の行為に没入できるのは、目標が常に明確で、かつフィードバックが直接伝わるからである。ハンドボール選手は、誰にボールをパスすればよいか、ドリブル距離はどの程度かを明確に理解している。ドリブルの感覚は直接に選手に伝わるし、選手がコートを移動するとき、他の選手もサポートに入るため複雑な運動を行う。

このように明確な目標と直接的なフィードバックをもたらす活動は、その行為者にフロー体験をもたらす大きな要因となる。

(4) フロー体験の特徴

フロー体験をもたらす活動は、絶えず行為の主体に挑戦を与え続けるため、日常生活における退屈や不安が意識に入り込む余地はない。フロー体験中は、他のあらゆることが心から消え去り、行為と意識は融合され、時間の流れを感じる感覚が変化し、ただその行為のためだけに存在するような感覚に陥る。

我々は、誰もが特定の行為に極度に集中し、没入し、一種のトランス状態に陥りながら、その行為を継続する場合がある。チクセントミハイは研究の初期において、ロッククライミングや音楽家など、非日常的な場面においてこのような経験を得る人々を調査の対象としてきたが、その後この概念が認知され、さまざまなケースに応用されると、仕事、学校、余暇などのあらゆる日常的場面でも「マイクロフロー」というかたちで経験されることが判明した。

チクセントミハイは、フロー体験において次の状況が生起すると述べた。⁽⁴¹⁾

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 限定された刺激領域への注意力の集中② 行為と意識の融合③ 自我意識の喪失（自己消失）④ 別の時間感覚⑤ 支配の感情⑥ 明瞭で明確なフィードバック⑦ 自己目的性（内発的報酬） |
|--|

(41) M. チクセントミハイ『楽しむということ』思索社、1991年、68-84頁。

a 限定された刺激領域への注意力の集中

フロー体験中、行為者は実施中の活動に完全に集中し、無関係な情報が意識されなくなる。例えば困難なロッククライミングの最中には、過去や未来は関係なく、岩の突起と亀裂の間を登る瞬間瞬間に全注意力が集中される。フローは結果へのいかなる配慮も含まない純粋な熱中の結果なのである。

ろくろで粘土をこねて壺をつくる様子を連想してもらいたい。電動ろくろの前に座り込んだ者が感じるのは指の感触だけだ。土の圧力が回転方向に指を弾き、壺の外周が整えられていく。ろくろを回すときの小宇宙は、僅かに両肩の間だけである。

人は日常生活を送るときは、心配事や考え事という雑念が意識の中に侵入してくるが、フロー体験がもたらす集中と没入感は、他の情報が入り込む余地を与えない。従って、不安や退屈などを忘れ、純粋に行為へ集中し「楽しさ」や「やりがい」だけを経験できる。

b 行為と意識の融合

限定された刺激領域への注意力の集中は、フロー体験の最も明瞭な特徴となる「行為と意識」の融合をもたらす。つまり行為に深く没入しているため、行為を意識することはあっても、その行為から切り離された自分自身を意識することがないのである。

チクセントミハイが内発的動機にもとづいて楽しさを求める人々を調査した際に、被験者たちが最高の状態に達したときの様子を「流れているような感覚だった」と描写したことが「フロー体験」の命名の由来であることは前述したが、この状態こそ正に行動と意識の融合にほかならない。

また、この瞬間は長く続くことは希であり、フロー体験が妨害を受けると、意識も行為から分離し始め、人はその活動を外から眺めるようになる。

c 自我意識の喪失（自己消失）

日常生活において、我々は絶えず自分自身へのこだわりや不安を意識している。例えば、「人から変だと思われていないか」「自分の行動は誤りではないか」「これをしたらどう思われるか」などを、明確に意図するか否かに関わらず、頻繁に考えている。つまり、日常生活において、自己イメージに関わること、狭義の自我に多大な時間を費やしている。

しかし、ある活動に高度な意識集中を行うことにより、行為と意識が融合した状態では、これらの自我をめぐる意識は消滅する。フロー体験中は、自分を吟味する余地すらなく、社会的な環境との調節は不要である。フローを体験しているときは、自分の行為を思い悩むことがない。また、こうした自我意識が失われた状態において、フローを体験するようになる。

フロー体験を得ている時には、その活動を共にに行っている人たちと「一体になる」感覚に陥ることもあるが、これも自我意識の喪失を意味する（これは、マズローが「個の超越」「世界との融合」と表現した状態とほぼ同じ状態である。）。自我と環境、自己と他者を隔てる境界が消滅するとき、人は世界と融合するが、自己の身体的リアリティまでが消滅する訳ではない。

d 別の時間感覚

フロー体験中には、通常と異なる時間感覚を味わうことが多い。

一般に、行為に没頭し、夢中になっていると「あっという間に時がたつ」と感じられる。また、時間の流れが遅くなることもある。例えば、バレリーナなどは、自分が空中で回転している間の時間がゆっくりと流れるように感じることもある。これもフロー体験がもたらす時間の感覚の変化である。

e 支配統制の感覚

フロー体験は、外部の環境や仕組みと自分が融合する感覚に加え、外部環境に対する支配感をもたらす。ゲームを行っている者は、自分が負けるという予測よりも、自分が勝つという支配の可能性を感じる。舞踏家は、転倒して失敗するぶざまな姿よりも、うまく演技できるという統制の可能性を感じる。

厳密に言えば、フロー状態にある者が感じるのは、自分がすべてを支配しているという客観的事実より、自分はすべてを支配すること可能だという主観的な感覚である。

このように、人々はフロー体験を得ている最中には、自分が全てを支配することができるという感覚に陥る。ロッククライミングなどの危険な行為を行っていたとしても、自分は現実的な危険を受けるという感覚より、自分が現実を支配しているという感覚を持つのである。

f 明瞭で明確なフィードバック

フロー体験時には、首尾一貫した矛盾のない行為からの明瞭かつ明確なフィードバックが必要である。刺激領域の限定、意識と行為の融合、対象への意識の集中、自我の喪失などが同時に発生したとき、単純化した行為は自動化され、なめらかに進行する。

g 自己目的性（内発的報酬）

自己目的性（Autotelic）とは、ギリシャ語の「自己（Auto）＋目的（telos）」から造成された言葉である。フロー体験を得ると、その行為それ自体のほかに目的や報酬は必要なく、外発的利益とは全く無縁の自己目的的な活動を行う傾向にある。その結果、「遊び」と「仕事」の区別はなくなる。この内発的報酬を作り出しやすい特性として、自己目的性（Autotelic personality）という用語さえ生まれている。

（5）フロー体験の及ぼす影響

フロー体験を得ることにより、どのような効果が生じるかについて述べる。

a 楽しいと感じる

フロー体験を得ることによって、何よりもまず人は「楽しさ」や「よろこび」を感じる。これは、フロー体験がもたらす活動への深い集中と没入感が、日常生活の退屈や不安を意識から追いやってしまうからである。つまり、「倦怠と不安を越えた」状態に楽しさや喜びが存在するのである。

b 行為の遂行を継続させる

人が行う行為の多くは外発的動機にもとづいて行われる。しかし、フロー体験は楽しさをもたらすため、人びとは自然とその行為の継続を求めるようになる。フロー体験を得ると、人は外発的報酬を求めるのではなく、内発的動機にもとづいて、その活動を行うこと自体を求めるようになる。

c 自己感覚の変化

フロー体験を得ている間は、絶えず能力を高めなければならないような挑戦を受ける。人はこのことが自己にもたらす影響について意識する余裕もないが、最善を尽くす。意識しない状態で能力を高めざるを得ないような活動を行った結果、新しい能力が養われ、時には自己に対する新しい感覚が生まれるようになる。

ホフマンとノバックは、フロー体験を得ることによって、「学習面の向上、感覚的行動の統制力の向上、探求力の向上、能動的な主観体験の向上」等の効果が生じると述べている。

(6) 魔術への応用

ゴールマンは瞑想とフロー体験には、次の共通の特徴があると指摘している。⁽⁴²⁾

- a 実行中の動作に気を散らされずに行動と意識が融合していること
- b 外界刺激への関心の欠落により、純粋な内部世界へ進入する刺激を意識から排除し、限定された刺激領域に意識集中すること
- c 高度に意識化された自分の役割や身体の状態への意図的な忘却
- d 環境の要求するものに適合した技能
- e 状況に応じたきっかけと適当な反応を認知する明晰さ

いずれも儀式魔術の司官を経験したことのある者には思い当たるだろう。

これまで述べたようにフロー体験は神秘主義と全く無関係であるが、両者の不明瞭な境目においては、きわめて類似した活動がなされている。素人がそれを区別するのは困難である。

伝統芸能の事例では、神楽の達人が踊るときの感覚を評し「調子がよいときは、自分で自分の舞に鳥肌が立つような感じがします。やること為すことが全部うまくいきます。そして自分ではないくらいに、その役に入りきります。」と言われる。⁽⁴³⁾

各種伝統芸能のなかでも神楽は宗教的な雰囲気の高い芸芸である。古来、神霊を演じる舞手は、舞台上の限られた時空間のなかで神霊の依ましとして機能した。

伝統芸能の枠組みは魔術儀式と大差ない。魔術儀式は、内容にもよるが、比較的複雑な手順を踏む「身体技法」と外観からは察知できない「精神技法」との複合的な運動である。

儀式実行者（Ritualist）は、あらかじめ定められたシナリオに沿って、移動し、発声し、共演する。身体技法を研ぎ澄ますのは当然のことであるが、儀式場（舞台）という限定された空間が無限の時空に拡張するのは、単に巧みな演出によるものではない。参加者（観客）と実行者（舞手）の間に霊魂の銀糸が張り巡らされたような強い共感の仕組みによって、実行者（舞手）の精神技法の成果物である「物語」が共有されるからである。この物語のなかで受肉した神々や妖物が儀式場（舞台）を闊歩する。

たとえば、イスラム教神秘主義者はジクルという絶え間ない祈りを行い神との合一に至る。しかし、この祈りへの集中、没我というプロセスにおいて、どこまでがフロー体験という肉体的、心理的な働きであり、どこからが本来の神秘体験なのだろうか。前述したように明確な境目というものはないので判断は困難だ。

逆に考えると、儀式魔術の精神技法を強化するためにフロー体験を呼び水として用いることが可能である。ジクルと同様に祈りの技法を極限まで高めた東方キリスト教会の静寂派（ヘシユカスト）の絶えざる祈りは、一種のフロー状態を導引部に利用する。

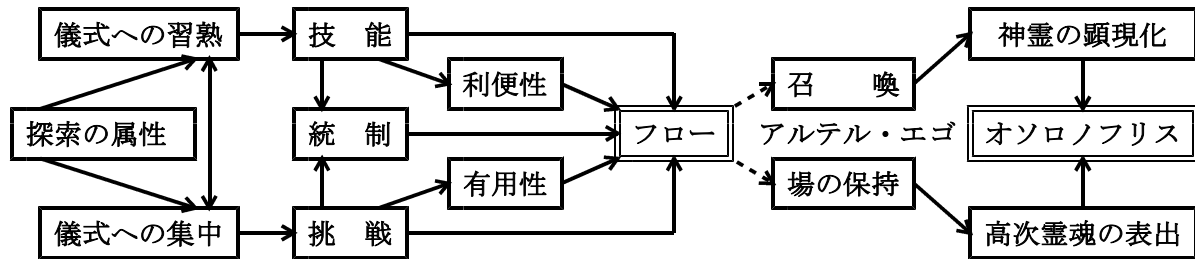
「わたしは心の祈りに非常に習熟しましたので、それを絶え間なく実行しました。そして、とうとうこの祈りが、わたしの働きかけが全くなくとも、自らなされているのを感じるまでになりました。つまりは、祈りは精神と心の中に、目覚めているときも、眠っているときも湧いて来ましたし、一瞬の間もとぎれることはなかったのです。」⁽⁴⁴⁾

(42) Goleman, D, *Meditation and Consciousness: An Asian Approach to Mental Health*, American Journal of Psychotherapy, 1976, 30:41-54.

(43) 迫俊道「芸北神楽におけるフロー」『フロー理論の展開』世界思想社、2003年、268頁。

(44) クレマン及びセール『イエスの祈り』新世社、1995年、121頁。

儀式魔術においては、クコーネンらのモデルの先に霊的プロセスを加えると下図のようになる。フロー体験を通り過ぎて、儀式執行者がオソロノフリス神を受肉する際のトリガーは、神霊の召喚と儀式場における場（魔術空間）の保持であり、両者の間にはアルテル・エゴという特殊な心理状態が介在する。



ここでは意図的にハウツウの部分「いかにして儀式魔術の手順のなかにフロー体験を組み込むか」を記述しない。フローは特別なテクニックなしで、日常的に経験するものである。従って、上図にもあるように儀式に習熟し、儀式に集中すれば自ずと発生する。そして、フロー体験に留まるか、その先の真の神秘体験に行き着くかは、儀式実践に踏み込んでみた段階でないと分からないからである。

第4ヶ月目の瞑想

瞑想課題：視覚的観想

今月の瞑想は視覚的観想である。観想をわざわざ視覚的と断ったのは、観想という概念が明確でないからだ。観想は映像的な幻視を組み立てる技術である。技術的にはマントラ瞑想とさほど変わらない。得られる結果が音声的なものでなく映像的になるだけだ。

観想の最初の段階は、視覚化の初期の訓練と似ている。椅子に座って好きなものを見つめるのである。これは動かないものであれば何でも良い。視覚化の訓練のときは、絵を除いたが、ここでは逆に絵のような複雑なものの方が良いことがある。ただし、勘違いしてもらっては困るが、視覚化が直観像なり表象像をできる限り鮮明に維持する訓練であるのに対して、観想は見ることによって心の内部への門を開こうという試みなのである。

最初の1週間は、あなたはできる限り正確に対象のものを見なさい。それを細部に至るまで観察し、記憶に焼き付けなさい。見つめていると様々な雑念が浮かんできます。しかし、マントラを唱えるという行為で雑念を駆逐したように、見つめるという行為で同じことをしなさい。マントラ瞑想では比較的簡単に雑念を駆逐できたあなたも、この視覚的イメージで心を一杯にするという技術は難しく感じるかもしれない。しかし、瞑想の技術というのはどれも近道はないのである。単調な苦痛に満ちた訓練でも、続けてやるといつか心の片隅に突破口が生じるものである。

第2週目は、対象となるものなしに、そのイメージを細部にいたるまで思い浮かべなさい。絵なら壁から外す。花瓶なら隣の部屋にもっていく。そして、イメージがうまく作れなければ短時間だけ、もとの対象物を見て、再度挑戦しなさい。そして、うまくイメージが作れるようになれば、瞑想の課題を選び、それとは別のイメージを保持しながら、課題を脳裏に浮かべる。これは視覚的イメージで意識を充満させ、かつ瞑想を行う方法である。「人生の意義」や「死にいたる扉」でも良い。その課題と選んだ視覚イメージ以外のものが意識から消え去ったとき、思いもよらない回答が、多くは視覚的イメージの形でもたらされるだろう。

第3週目は、観想とマントラ瞑想を組み合わせる。『ゾーハルの書』にある方法を紹介しよう。左手を見つめながらThQN（タカン）「強さ」という単語を繰り返して唱える。手のイメージの作り方は、1～2週と同じである。あなたは自分の手にある力強さが生の実感として沸き上がってくるだろう。手のイメージが早期に確立できたら、草花を対象とし、ThPARTh（ティパレト）「美」というマントラを唱える。これは自分自身のなかにある美の観念を呼び起こす観想なので、目の前の或いは想像上の花が「美」を放射している様子を併せて想像すること。むろん、これらばかりでなく、ヘブル語の言葉とそれに合致したイメージを組み合わせるだけで、幾つものヴァリエーションが生じる。動物の子供の写真（人間の赤子は相応しくない）を前に、AHB（アヘブ）「愛」というマントラを唱えても良い。

第4週目は、同じく『ゾーハルの書』にある瞑想法で「星の観想」という。

『イザヤ書』40章26に曰く。「目を高くあげて、誰がこれらのものを創造したかを見よ。主は数を調べて万軍を率い出し、各々をその名で呼ばれる」

『ゾーハルの書』では、この文中のMI「誰が」とALH「これら」を組み合わせ、ALHIM「エロヒム」を得ている。

冬場は困難であるが、星空を見つめこの『イザヤ書』の章句に思いをいたす。つまり、壮麗な星空の背後にその創造主の御業を見るのである。組み合わせで唱えるマントラは、前章で行った「宇宙の主」である。

なお、雲の多い季節や寒い夜は、奇麗に取れた天体写真で代用しても良い。薔薇星雲の写真などは宇宙の神秘を語るにあまりある素材である。

今月の読書

今月の学習の参考になる著作は、以下のとおりである。図書館で読むのも良いが、必読図書については購入することを勧める。

1 必読図書

今月の学習の参考となる著作は以下のとおりである。

M・P・ホール 『人間－密儀の神殿』 人文書院、1982年。

2 推薦図書

阿部謹也 『ヨーロッパ中世の宇宙観』 講談社、1991年。

ジャン・チュイリエ 『眠りの魔術師メスメル』 工作舎、1992年。

Regardie, Israel. *The Philosopher's Stone*. Whitefish : Kessinger Publishing Company, 1995.

少し専門的になるが、ゲマトリアについては次の書籍が本格的な文献である。

Glazerson, Matityahu. *Building Blocks of the Soul: Studies on the Letters and Words of the Hebrew Language*. New York : Jason Aronson, 1996.

本書はゲマトリア的操作の実例を示すもので示唆に富んでいるが初心者向けではない。

Coleman, Cicero, Kuntz. *Sepher Sapphires*. Vol. 1 & 2. St. Paul : Llewellyn, 2008.

本書は、辞書である。クロウリーの『777』が比較的古くなったので、手元に置いても差し支えないだろう。

Blech, Benjamin. *Secrets of Hebrew Words*. New York : Jason Aronson, 1995.

Blech, Benjamin. *More Secrets of Hebrew Words : Holy Days and Happy Days*. New York : Jason Aronson, 1995.

ベンジャミンの文書はゲマトリアの体系的解説ではない。むしろ、その応用の結果、ヘブル語の単語がどんな意味をもつかを示す実例集である。

第4ヶ月目の課題

この課題は、今月の作業が終了した後に記入しなさい。記入した課題は魔法日記のコピーと一緒に提出すること。

- 1 古代人は何故、小宇宙と大宇宙が対応すると考えたのか。
- 2 惑星の人間に対する影響力について自分なりの意見をまとめなさい。
- 3 感覚の天球の内部に充満するイメージとは何か。
- 4 メスメリズムの歴史的意義は何か。
- 5 あなたが最も強く残像視を感じたのは何か。
- 6 図形による視覚化の訓練で、最も困難なのはどこだったか。
- 7 魔法鏡を作成したものは、サイズを記入したその略図を付しなさい。
- 8 オーラ視覚はどの程度発達したか。
- 9 ゲマトリアの実習例をひとつ書きなさい。